俳句雑誌

水明

2021　12月号

令和三年十二月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十四巻第十二号

《今月のかな女》

年の市曲がれば暗き神社かな

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

年の暮に、正月用の注連飾や飾り物・縁起物・若水桶・三宝・破魔弓・盆栽・雑貨など、いろいろな物を売るために立つ市のことである。本句の時代と今では、品物や売手買手の様子が変わってきていると思うが、新年を迎える心の高揚感は同じだ。名高い神社ではなく、町の氏神のこじんまりした神社であろう。元旦になれば、近在の氏子達が初詣に集まるが、今はひっそりとしている。（鬼之介・註）

水　明

第1095号

―華の一句―

満月や白きハイウェイ空に入る

小林京子

真っ直ぐに続いている夜の高速道路を、快適に飛ばしているドライバーである。正面に、煌々と輝く満月が、おいでおいでをするかのように、光を降り注いでいる。

車が密集して走っている高速道路ではなく、前後に殆ど車がいないような道路を想像する。この路が天空の果てまで続いていて、やがては車ごと満月の中へ吸い込まれてゆくように思えてくる。

（鬼之介・推薦）

水明

令和３年
１２月号

今月のかな女　1
華の一句　山本鬼之介　4
豪農屋敷（作品）　矢作水尾　6
紅葉（近詠）　田寺玲子　7
時の町（近詠）　松井由紀子　8
風知草　雪欄作家近詠鑑賞
硯箱　季音月評　井口俊晴　10
季音「雪」（同人作品）　柚木治子　吉住光弥　由良ゆら女　ほか　12
季音「月」（同人作品）　丸山マスミ　渡辺舎人　鳥羽和風　ほか　19
季音「花」（同人作品）　井上玲子　近藤徹平　正木萬蝶　ほか　24
現代俳句鑑賞　網野月を　28
『水明誌』を繙く　羽村美和子　30

水明集

塩野久子　渋谷きいち
曲淵徹雄　ほか

水明集作品評　山本鬼之介　44
水琴窟（夏季競詠鑑賞）　池田雅夫　48
山紫集　50
鼓笛集（同人作品）・私の一句　56
俳句日めくりカレンダー　59
俳誌望見　梅澤佐江　60
句集喝采　近藤徹平　61
水明塾　日高道を・網野月を　62
水明例会報・各地句会報　68・71
水明通信　76
新春俳句大会のお知らせ　78
新珠賞作品募集　79
インターネット句会のご案内　80
風声　82
水明発展基金御礼　83
後記　84

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

豪農屋敷

山本鬼之介

髪に草の実頬にめしつぶ吉野山

助教熱弁秋たけなはの古墳群

ゆく秋や産寧坂のめぐりあひ

継目なき梁二十間すきま風

時雨忌の一本締めの余韻かな

神の座へ初霜を踏む浅沓よ

新羅琴ひびけ寒月冴ゆる夜に

枝はなれ流転の姫となる枯葉

紅葉

矢作水尾

山門を落葉の駈くる禅の寺

孤高の樹のぼりつめたる蔦紅葉

丈高き紅葉の一樹奥の院

記念碑に夫の名前や天高し

夫の碑へそつと秋思の手を置きぬ

山寺のひと日暮れゆく薄紅葉

名刹の音なき庭の落葉踏む

コロナ禍の外出を控えた生活の中で週に一度の菩提寺への墓参が、四季の移り変わりを教えてくれる。菩提寺は一山を背に地味な由緒ある古刹で、手入れの行き届いた樹木や草花が、寺を明るくしている。墓参の折にわからない草花を見つけると、作業中の庭師に聞いては楽しんでいる。

山の中腹にある五重の塔は夕日に映えて輝き、見上げる大樹は鴉のねぐらになっていて、夕暮には鳥達が群をなして帰って来る。やがて寺は夜の帳につつまれる。

時の町

田寺玲子

鰡飛ぶや明石の門波かがよへる

子午線の真上をまたぐ秋の虹

天高し汽艇（ランチ）行き交ふ瀬戸の海

椅子倒しプラネタリウムを秋うらら

まかがやく天体ドーム秋夕焼

夕映えの架橋はるかに鳥渡る

秋ともし海を眼下に時計台

日本の標準時となる東経135度の子午線のとおる兵庫県明石市に居住し五十年が過ぎました。一番長く住んでいる町です。

今年は、日本標準時制度が制定され、135年を迎えるのを記念し、子午線上に建つ、市立天文科学館では、標準時の番人である、平成三年の旧タイプと、現在のとの新旧の原子時計の展示があり、時の経過を感じました。時の町の住人としても、時間について関心を深めなければと思っております。

風知草

◎季音雪欄作家近詠鑑賞

松井由紀子

◇「若狭」の食文化（九月号）

島津初花

草いきれ若狭街道分岐点
小浜線青田の波を分けて行く
夏空や若狭のはてに青葉山

二〇一七年の初夏、私は水明若狭句碑めぐりのバスツアーに参加し初めてその地を訪れました。そこは明るく澄んだ空気が流れていて古事記や日本書紀に典拠を持つ古刹や史跡も多く品格のある土地柄に思えました。掲出のお句からは誇りある街道の起点の様子や爽やかな若狭の緑と風を感じとることが出来ます。

梅雨晴や輝きをりし埴輪土器
老鶯の啼くや王家の谷深し

遺跡の発掘作業は地味で根気の要る仕事ですが貴重な遺物に出会うわくわく感が当事者の意欲をかきたてるのでしょう。死者への愛惜と祈りから造られ納められたそれらは自己主張などない穏やかで温かい癒やしの形として出現しています。そして老鶯もまた往時に変らぬ囀りで死者を慰めているのです。

◇老いるということ（九月号）

山中みどり

白パナマ帽少し斜めが似合ふ人
好く枯れた男に派手なアロハシャツ
淋しいと甘酒孫の婚約式

小粋なパナマ帽とアロハシャツがお似合いなんて素敵なパートナーでいらっしゃる！きっと豊かな内面をお持ちの明るく寛容なご老人なのでしょう。悪怯れないで甘酒の祝盃をあげられる光景がほのぼのと和みます。

老ふたり手をとり仰ぐ夏の月
反古にせし恋の手紙や白槿

涼やかな夏の月短い会話が聞こえるような静かな夜です。

沢山の若き日の恋文を処分されたのでしょうか、お二人の思い出の始まりが年を経た今、真白な木槿の花に変化(へんげ)して咲いているような。

◇**澪つくし**（十月号）　**由良ゆら女**

動かれぬ家居いつまで山椒魚
一雨のありし渡し場夜の秋

閉門蟄居を申し付けられたような息苦しい日々に少し風が通い出しました。閉じこめられると「山椒魚」（井伏鱒二）のように太り呻き意地悪く変貌しそうな自分が危ぶまれました。残暑の厳しい日の夕暮れ突然の驟雨が去ると空気は一変しっとしりとモノクロの版画のような渡し場の夜景は新涼へ。

潮入りに背を並べて鯊日和
古都よりの秋霖抱き大河ゆく
鉄橋を灯一筋天の川

秋、鯊は上げ潮にのって河口にも群がります穏やかな好日岸辺には待ちかねた鯊釣りが釣果を競って背を並べます。滔滔と流れる雨後の淀川だが京都の宇治辺りを濡らした雨も交ざっていると思えば床しくもあるでしょう。暗い大河の鉄橋を光を曳いて夜汽車が渡って行きます。その先の分岐点で向きを替えもしや銀河へ向かうかと、幻想がひろがります。

◇**天球儀**（十月号）　**網野月を**

星祀るだけで所詮は他人事
もう二度と心に決めて星祭
星祀る媚薬と云ふはプラシーボ

一連のお句からは何故か恨み節めいた気分と少年のようなセンチメントが。妄想好きな私が物語りを仕立てるならば星祭に切なく願った逢瀬は果たせずもう二度と恋はすまじと痛む心、あの甘やかな媚薬は実は偽薬であったのだ。ああ！となりました。下世話な解釈お許しください。

覗かれること知りつつも星祭
時計して眠る男や星祭

誰に覗かれようと作者は哀しみの本音の吐露を星に告げたのでしょう。腕時計は時を刻み男は深く眠り祭は過ぎて行きます。そしていつもの朝が、ざわめく日常が乾いた表情で戻ってくるのです。

硯箱

◆季音十月

井口俊晴

尾を振つて金魚は惚気聞く素振り　境　延昭

マンションの一室、エアコンが効いているとはいえ、カーテン越しの日差しはかなり強い。部屋の主人のアラフォー女性は、窓辺の金魚鉢に向かって、さっきから何事か囁いている。どうやら夢中になっている男性との惚気話をしているらしい。「だってさ、彼ったら…」と、外では話し難いことまで喋っている。金魚鉢の中を泳いでいる彼女は、真っ赤な尾鰭を鷹揚に振って泡をプクプク、仕方なく相鎚を打っている様子。のどかな時間が流れていく。

盆僧のやさしさに触れ辞儀深く　波多野寿子

お盆を迎えると、いつもは忘れていた故人のことを思い出す。腹が立ったこともあるが、たいていは懐かしい思い出ばかり。久し振りにお坊様を迎え、有難いお経をあげて頂いた後は、他愛ない世間話など。嫌な顔もせずに耳を傾け、相鎚を打って下さる。その優しさに触れて、お坊様を玄関に送り出す時には、深々とお辞儀をした私であった。

夜鳴らす鬼灯蛇を呼ぶといふ　茂木和子

熟した鬼灯の実を揉んで種を除き、口に含んで鳴らす。幼い頃の私はこれが苦手であった。すぐ皮が破れてしまうからだ。そんな鬼灯ではあるが、玩具が少ない時代にはなかなか人気があって、口を尖らせ、上手に鬼灯を鳴らす子が多かったものだ。そして、鬼灯を夜鳴らすと、なぜか暗闇から蛇が出てくるぞと脅かされた。何故だろうか。考えてみれば、神話のヤマタノオロチは鬼灯みたいに真っ赤な眼をしていたと、古事記は伝えている。遠い昔から伝わる恐怖の連想のようなものだろうか。

夏蝶の白きが日差しまき散らす　原田想子

夏の午後、二匹の真っ白な蝶々が原っぱを飛んでいる。暑

い日差しを浴び、伸びるだけ伸びた雑草の上を、舞うように縺れ合って飛んでいる。降りそそぐ光を白い羽に受け、ひらひらと、二匹はまるでふざけ合っているようだ。強烈な日差しが反射されて、辺りに光のシャワーをまき散らしている。地面には蝶々たちの黒い影が踊っている。

病癒ゆ朝顔に水惜しみなく　　高島寛治

夏風邪をひいてしまった。エアコンをつけたまま寝たのが良くなかったようだ。お陰で何年振りだろう、三日も寝込んでしまった。それでも、薬を飲んで大人しくしていたので、今朝はもうすっかり調子がいい。顔を洗ってさっぱりしたところで、庭の朝顔にたっぷり水を撒いてやった。井戸水を勢いよく吸い上げるモーターの音が心地よい。

夏茜荒川を発つ練習機　　近藤徹平

埼玉県桶川市のホンダエアポート、荒川の河川敷にあり、軽飛行機による遊覧飛行を楽しむ拠点となっている。日曜にさいたま新都心の上空を飛んでいるのは、そこから飛び立って来たものだ。赤とんぼの仲間である夏茜がスイスイ飛んでいる川沿いの飛行場は、練習機も揃えていて、大空に憧れる若者たちを待ち構えている。そういえば、太平洋戦争の末期に予科練の若者を乗せた練習機は「赤とんぼ」と呼ばれていたっけ。

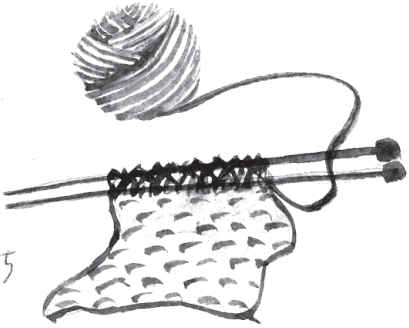
七夕の願ひ園児の鏡文字　　福田千春

幼稚園の七夕祭り。笹の葉に吊った色とりどりの短冊に、園児たちの幼い願いが書いてある。その中に「鏡文字」で書かれた短冊が混じっていた。上下はそのままで、左右が反転している鏡文字。書けと言われると難しい。字を覚え始めた頃とか、左利きの子供に多いと言われている。よく分からないが、いつの間にか正しく書けるようになるから、心配することはない。小っちゃな子が一生懸命に書いた短冊を、そのまま吊ってあげた優しさが伝わってくる。

朝粥のことさら旨し秋めきて　　瀬戸雄二郎

トーストにベーコンエッグ、いつもの決まりきった朝食には食傷気味。そう思っていたところ、今朝は家人が真っ白なお粥を作ってくれた。たっぷりしたお椀の脇には、なんと塩鮭と昆布まで添えてある。熱いお粥を、ふうふう吹きながら口に運ぶ。実に美味しい。このところ胃が疲れ気味だったので、ほどよい塩味がことさら嬉しい。そう、窓の外はすっかり秋らしくなってきた。

季音雪



地上絵　柚木治子

川霧や仙女のごとくふはり立つ
ＳＬの汽笛の余韻谿紅葉
呉服売る口当り良き秋袷
大胆な子の地上絵や鳥渡る
気遣ひの娘を帰す十三夜

大池晩秋　由良ゆら女

良寛の筆の流麗秋の雲
水に泛く日輪ゆらし鴨来る
皺の手をかざし大池秋の蓮
破れ蓮水の底には祖の在
敗荷や撥音はげし壇ノ浦

残心　吉住光弥

弓道に残心のあり爽やかに
日高地やサイロも満ちて爽やかに
歌グロリア開く高窓蔦が聞く
漬物(がっこ)噛む戸外(そと)は風音温め酒
人恋へば徳利肌撫づ温め酒

秋を恋して　網野月を

秋苑や枕と化する黒鞄
桔梗色の中に浮かびぬ後の月
焼き栗の煙の匂ひ維納愛憎
黄コスモス残影となり目に沁みる
数日の砂漠の露と覚えけり

かずら橋　石井喜恵

紫蘇の実や金の銘ある長寿箸
菊膾崩すに惜しき口触り
新豆腐崩さぬものに志
天高し一歩に揺るるかずら橋
破船なほ深きに沈み雁渡る

秋耕　石山かつ子

夜は夜の獣径あり秋の山
棒持てば吾は大将秋の山
あとつぎもなく秋耕の二人かな
水うまし平家の里の新豆腐
湯の宿は渓に添ひたり新豆腐

放射霧　大橋廸代

連山に抱かる生国放射霧
金堂に木履集結雁渡し
羅漢堂出で秋光に眩みけり
敗荷や舌をみせをる撫仏
造影剤に灼かるる五内秋渇き

千切れ雲　大村節代

返却の「ハイネ」へはさむ初紅葉
受け口の女いきいき柿啜る
味も名もよろし御所柿富有柿
須走口に息をひそむる毒茸
秋起し八郎潟に千切れ雲

鉦叩　栢尾さく子

切り口は汐の香を噴く鬼芒
質朴な木椅子の儀式空高し
亡びゆく種族のをどり初月夜
秋子嵯迷恋しき夜の鉦叩
落鮎に力抜きたる流れかな

菊の宴　菊池ひろこ

仕組まれし二度目の出逢ひ菊の宴
重陽や謂れの知れぬ物を干す
漢字パズル碁盤目うづめゆく夜長
仮寓への順路仔細に十三夜
爪で栗剥くに慣れたる家長の座

秋漫ろ　五明　昇

木曽節を薬味に峡の走り蕎麦
しののめや川霧疾き古戦場
里宮に婚の華やぎ秋の嶺
行者講大釜に噴くむかご飯
夕映えやジャズの音零す蔦の窓

一号館　境　延昭

すつぽりと蔦が土蔵をからめとる
祝言の謡三番さやけしや
望の月公会堂に平家琵琶
蔦かづら煉瓦造りの一号館
村まつり鶏一羽消えにけり

鬨の声　椎野美代子

蔦の風沖の潮目が詳らか
累代の蔵窓明り蔦紅葉
鬨の声上げんばかりや蔦紅葉
はめごろしの三角出窓蔦迫る
蔦攻めるぶつきら棒の隣の木

うばたま　島津初花

桧扇の種漆黒を極めたり
露草にわが終章の藍の色
ふる里に行き止り無し曼珠沙華
堰抜いて川底あらは秋の風
新築の足場外さる秋の天

零余子飯　鈴木康世

峡の宿手作り味噌と零余子飯
むかご飯に話のはづむ戦中派
夫の知らぬ家族の増えて零余子飯
蜉蝣や野川の流れ女体めく
蜉蝣の舞ふごと飛びて落ちゆけり

秋深し　田寺玲子

柿衞の芭蕉の軸や秋の声
敗荷や闇に聳ゆる大手門
敗荷へ一閃の日矢風煽つ
秋ゆふべ汀に長き足の跡
六甲の一朶の雲や秋深し

風紋　十倉和子

風紋は神のたはむれ雁の列
浜に出て泣き砂泣かす星月夜
木刀の素振りはるかに鳥渡る
色鳥や旅の一座の来てをりぬ
ゴン狐かも大粒の栗裏口に

ヒマラヤ朝顔　永野史代

ヒマラヤ朝顔咲かせてコロナ籠りかな
紫蘇の実一粒口に残りて供養の膳
落穂拾ふ一枚の画布想ひつつ
落穂拾ふ爺婆の身の昏れゆけり
十三夜今宵は妻と二人きり

黄落　西山貴美子

筆塚の一文字太く昼の虫
ゐのこづち百夜参りの膝に触れ
黄落を来て黄表紙と遊びけり
古酒酌むや奇縁の眉を寄せ合うて
山粧ふ露座仏の肩こんもりと

長き夜　波多野寿子

長き夜や眉目よき友を悼みをり
秋灯ほのぼのとあり夢二の絵
琴唄をふと口ずさむ十三夜
あをぞらの深さよ柿のたわわなる
野紺菊石占ひの石の神

旅　星野和葉

落鮎の先ざき星に見守らる
下りても天に昇らむ秋の鮎
足場組む若きらの気鳥渡る
樹木葬願ひ友逝く渡り鳥
人は今旅を控へし鳥渡る

温め酒　茂木和子

秋耕の太陽暮れを躊躇ひて
跡継ぎの出来て田畑秋耕す
秋耕人の影は名画のワンシーン
荒草もあつと云ふ間に秋起す
有り物の撮み上上温め酒

秋時雨　矢作水尾

絢爛の夕日千葉から落花生
秋時雨清漣満つる水面かな
握り飯海苔の匂ひや秋の山
ともがきの欠けて秋思の老の膝
砂利船の船縁に立ち十三夜

霧の音　山中みどり

銀嶺の残照黄金色の上高地
山の霧鎮もるホテルの赤き屋根
樹間ゆく朝霧焼き立てクロワッサン
マントルピースの火に風送る革吹子
軒先のランタン揺らす霧の音

俳句

1月号予告

12月25日発売
予価950円(本体864円)⑩

豪華新年詠

柿本多映　大串章　高野ムツオ
星野椿　高橋睦郎　西村和子
矢島渚男　大石悦子　正木ゆう子
宇多喜代子　黒田杏子　片山由美子
池田澄子　大木あまり　長谷川櫂
今瀬剛一　中村和弘　小澤實　ほか
宮坂静生　寺井谷子
柏原眠雨　戸恒東人　藺草慶子
本井英　奥坂まや　抜井諒一

新春座談会
俳句の宿題
季語・ことば／結社・座／俳句の本質　ほか
筑紫磐井×対馬康子×阪西敦子×高柳克弘×生駒大祐

追悼
深見けん二
遺作／追悼100句選＋解説／追悼エッセイ／人生と作品／一句回想／アルバム
合評鼎談〈新メンバー〉…佐怒賀正美・望月周・相子智恵

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」(https://bookwalker.jp/)など電子書店で購入できます。

発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

季音月

菊慈童　丸山マスミ

一病も息災のうち穂紫蘇摘む
夜上がりの千年杉に爽気満つ
爽やかや柾目の下駄に置く蹠(あうら)
菊酒や永久に微笑む菊慈童
湯揉み唄ほつこりと聞く夜寒かな

止め椀　鳥羽和風

白壁の土蔵はゆかし柚子は黄に
止め椀に柚子の香仄と骨納め
初時雨ポストに深く入る手首
缶蹴りの缶と転がる小春かな
初鴨や人の世もある浮き沈み

木犀　渡辺舎人

金木犀対きあふことを美しく
骨片のごとき散り敷き銀木犀
玉入れの玉が沸き立つ運動会
禅房に円相の幅秋に臍
みちのくや負蝗虫の前かがり

零れむかご　藤澤喜久

ポケットのむかご転がる路線バス
零れむかごを民話の狐来て拾ふ
獣道山風落とす玄圃梨
林檎たわわ初恋といふ木の下に
黄落や夕日金色神さぶる

御座船　森本早苗

初紅葉御座船の窓閉ぢしまま
度肝抜く現代アート豊の秋
長月を病むニャー君に膝を貸す
秋蝶の限りある日や我も又
老骨にけふも鞭打つ敗荷

秋時雨　梅澤佐江

恋の矢は矢数に非ず西鶴忌
聞き役の筈の深入り落花生
其の中の一輪を摘む野菊道
マーラーの楽章佳境なる秋思
銀色に街を染めゆく秋時雨

秋高し　高島寛治

秋高し波止に居並ぶ干物売り
夜勤の子送り出したる夜寒かな
書き出しで躓く手紙夜寒し
山霧の七曲りして去りにけり
よく笑ふ娘に育ち林檎狩り

草もみぢ　井上燈女

草もみぢ利根の渡しに旗上げて
利根川へ落暉があふれ草もみぢ
母の物着こなす姉妹菊日和
大根干す母ゆつたりと時を待つ
新豆腐水割つて売るたなごころ

裂け石榴　宇田白鷺

見上げたる寺の釣鐘裂け石榴
薄赤き歯をのぞかせる裂け石榴
ふうはりと風にゆられし石榴かな
鐘五つ鳴りて秋晴寺掃除
菊の香を纏ふ羽賀寺の仏かな

冬めける　池田雅夫

旧跡の碑文のかすれ文化の日
初冬や心の隙を埋むる図書
連日の雨の暗さや冬めける
白砂をひき締むる雨冬の浜
小春日や焦点のなき遠眼差し

小江戸　荒井倶子

霧深し宇宙船めく山の宿
すれ交ふリフトは無人霧流る
一合の酒は妙薬秋刀魚食ぶ
レモン切る夫婦喧嘩の次の朝
父祖の地は小江戸と呼ばれ秋祭

天高し　大場順子

朗朗と祝の口上天高し
園児等の声も鈴生り林檎園
炊き上げて山の日の香の零余子飯
蔦かづら分けて確かむ道しるべ
霧の帳開き入りゆく上高地

長月　井関礼子

籠り居てはや長月の季の薫り
長月や世情に籠る日々に倦み
長月の氏神詣でもままならず
籠る身を木犀の香にいやされて
花茗荷ひと手間なりし小半日

鵙日和　森川義子

唐突に谷を震はす鵙の声
節ぶしの機嫌よろしき鵙日和
産土を指す方位盤天高し
ゴンドラの終点映ゆる紅葉晴
書き置きの一行にある秋思かな

西鶴忌　山田美佐尾

子規庵の土間のこほろぎ人を恋ふ
縁側に名月仰ぎ畏まる
分校の帰りのチャイム秋しぐれ
浮世絵や髷の乱れを西鶴忌
手が語る人形浄瑠璃西鶴忌

かじけどり　霜中冬至

味噌蔵の匂も好むしぐれ月
胃袋の少し斜めやしぐれ月
松茸をねこそぎ取つた時雨月
名も知らぬ冬鳥の来て子等騒ぐ
鳥羽川のよどみに集ふかじけ鳥

栗　松宮保人

バス停に行商ひとり秋の鯖
蘇る里の古墳や蕎麦の花
自由研究子どもは学者休暇明け
栗干さる笊を過りし軒の影
大輪を咲かせしあるじ菊の家

秋の雨　松井由紀子

言ひ残すことのあれこれ秋の雨
秋霖に芯まで濡るる訣れかな
天の川うねる強風注意報
帰心なほ蔦紅葉散る石畳
山峡の谷深くして秋高し

鰯雲　川崎道子

鰯雲旅先に曳く地引網
水揚げのこぼれ待つ猫鰯雲
鰯雲老漁夫明日の天気読む
褪色の千本格子秋の風
敗荷に追ひ討ちのごと豪雨打つ

秋　井口俊晴

声すれど芒が原の神隠し
重陽や食用菊の並ぶ店
野良仕事よき日を約す朝の霧
さらし巻く胸が気になる秋祭
親のやうな女将相手に温め酒

ワイナリー　町野広子

秋山の際に老舗のワイナリー
秋山に限界集落呑み込まる
竹の春我を見下ろす阿弥陀仏
リフォームのシート外さる竹の春
大仏の螺髪くるくる竹の春

秋の山　内田恵子

バーベキューの煙真つ直ぐ秋高し
蔦紅葉蔵に静かに寝るワイン
深入りて帰路見失ふ秋の山
秋の山獣の覗く露天風呂
賢治忌のカフェにひとりや星月夜

峡の空　上戸千津子

遠景や柿は浮くかに峡の空
先人も毬は斯くやと栗拾ふ
廃屋の扉の錆や蔦かづら
秋寂ぶや山城跡の朽ちし倉
秋波に続く故郷や忘れ潮

むかご飯　岡野順子

故郷の訛にホッとむかご飯
むかご飯母の匂に炊きあがる
精一杯働いて待つむかご飯
噛むとねつとりとしてむかご飯
噛みしめてかみしめてむかご飯

愛犬　西浦千枝子

中将姫の碑に映ゆ初紅葉
古里の記憶ふつふつ夜長かな
ちつちやな壺で戻る愛犬鰯雲
愛犬を手厚く葬る秋の昼
犬の葬に読経のなくて菊日和

今年米　野口和子

越後より畑終ひといふ今年米
山寺の東司に挿され赤のまま
包丁を研ぎて裏口秋の暮
雨降れば傘になりたし芭蕉の葉
苔むすや小さきつくばひ石蕗の花

末枯　松山清子

地震すぎてしみじみひとり夜長かな
夜長かな剣豪小説今佳境
駅下りて足早となる夜寒かな
末枯の河川敷より子の歓声
海臨む窓全開に天の川

☆

☆

季音花

野菊摘む　井上玲子

長き夜や鳥羽僧正と一つ灯に
晩鐘のわたる嵯峨野路秋思かな
瞑りて聴く夜想曲秋思かな
野菊一輪梁くろぐろと蕎麦処
見沼田の空は茜に野菊摘む

巧拙　正木萬蝶

デコルテの鎖骨麗し今日の菊
扁額の巧拙如何に三九日
不機嫌を誘ふ指先黒葡萄
内弟子へ眼よこしまとろろ汁
すぐばれる君の企み石榴笑む

花時計　近藤徹平

秋分正午公園の花時計
大の字の顔に秋分の太陽
大利根川原迫り上ぐる赤い月
石塊に戻りし墓碑や秋時雨
ピーナッツカラオケバーの痴話げんか

ふるさと　大塚茂子

峡の家の軒に陽を呼ぶ柿簾
碁石置き夫の居眠り吊し柿
畦を行く飛ぶ翔ぶ蝗捕る老女
秩父産金胡麻を刈る夕畑
傾斜畑雲につながる蕎麦の花

重陽　石田慶子

九十の母の差配や菊の酒
重陽や課長代理のピンヒール
孫や子の企て見事敬老日
百姓を継がぬ父の背落穂拾ふ
ほろよひのうさぎ論争今日の月

幼妻　野田静香

弧を描くレモンをキャッチ幼妻
秋深し役者名利の果て太鼓
終バスの人それぞれに月明り
終演の覚め遣らぬ宵実葛
秋灯やキネマの神様降りて来る

秋の夜　日高道を

仲秋や兎の耳に千切れ雲
三日月の舟の細さよ母百寿
長き夜やまづ「桐壺」を手に取りて
星飛ぶや山峡の闇なほ深く
長き夜や寝返りを打つ妻の足

終はりとは　青木鶴城

覚えられない円周率や雁渡し
栗飯やとんがつていた日の弁当
初雁やせはしき今日となる気配
もうひとつこぼす溜息秋海棠
終はりとは次の始まり破芭蕉

秋の蝶　石川理恵

空見えぬほどに茂りて糸瓜棚
天と地の恵みを搾り糸瓜水
十字路を巧みに曲がり秋の蝶
姫さまも殿も徒なり秋祭
トロッコに乗りバスに乗り霧の宿

朝霧　佐々木典子

朝霧や平たき街も絵の如し
りんご見てあの唄うたふ昭和かな
りんごかじり故郷想ふ泪かな
鵙高音下野の空透明に
ざつくりと割れし石榴や空笑ふ

昴　野平美紗子

昴さがすやや寒けれど確と見ゆ
やや寒の今朝も微笑む遺影の母
柿ひとつやつと味見の色となる
初生りの柿を遺影の妣に献ず
行儀よく稲株並ぶ刈田かな

熟柿　福田千春

存へて腕にひ孫菊の宴
暮れ切れぬ光に映えて熟柿の朱
重陽や苦手の九九の九の段
ざあと来て鳥賑やかや落穂の田
栗茹でて母すこやかな頃の味

茶の花　飛永鼓

柴栗を蹴飛ばして行く通学路
柿を剥く今も昔もよなべかな
点在の若狭の古墳虫しぐれ
茶の花や米の炊かぬ日時にあり
茶の花や小さき幸せ足元に

栗名月　河野はるみ

雨戸開け朝の爽やか全部入れ
重陽や叔父が自慢の酒持ちて
久久に車座で呑む菊の宴
手酌酒少し温めや秋さびし
友と居て栗満月や乾杯

秋の夜　下川光子

校庭の土俵いつしか虫の闇
灯台の見送つてゐる流れ星
露天湯に体あづけて小望月
月渡る大クレーンの首浮かぶ
金木犀いつもの道を特別に

長き夜　田中章嘉

虫の音の藪沢なれど測量す
長き夜や我が人生の回顧録
長き夜の寝つけぬ耳にクラシック
藁塚も稲架もなくて雀飛ぶ
彼の山も錦を纏ひ睡りつく

松島　熊倉千重子

コスモス野揺れて次々目を覚ます
栗おこは粒を数ふる次男坊
遊覧船で巡る松島鳥渡る
薄紅葉ぼかしを効かす俄画家
スケボー少年照葉の園をすいすいと

笑栗　宮﨑チアキ

束の間の休息取れば秋の蝶
笑栗や艶の三つ子がまるまると
上段の間にとどく夕陽や三九日
雨音のいとしとやかに窓の秋
文机の疵懐かしき素秋かな

秋の夜　中野彊

カーテンを開けて朝あり仏桑花
秋空にはしごをかけて老職人
秋の夜のドラマの愛の結ばれし
名月の明かりが床を磨きけり
秋澄みて余命宣告伝へきく

秋の夜　宮崎紫水

秋の朝真一文字に鐘響く
秋の昼句は浮かばずにペン回す
立ち話尽きぬ女生徒秋の暮
アルバムの整理手付かず秋の宵
峠越えする列車の音秋の夜

秋の蝶　瀬戸雄二郎

失せにけり失せにけりと霧中へ
ベランダに煙草の火ぽつ霧の中
この海霧に着陸するかパイロット
越冬と覚悟を決めし秋の蝶
驚きて屋根を越えたり秋の蝶

秋日和　後藤綾子

久久の窓全開の秋日和
秋日和俳句日和のお濠端
突堤に並ぶ釣人秋日和
船宿に自慢の魚拓鰯雲
秋桜牧場のサイロの赤き屋根

秋の色　葛城千世子

朝散歩徐々に明けゆく風の色
水音たて浅瀬ゆく鯉秋の色
温暖化の対策必須敗れ蓮
ころころと変はる方針秋の空
昨日より夕陽下なり秋の光

現代俳句鑑賞

網野月を

襟首に刺青のをんな夏帽子　山本鬼之介

（『俳句』10月号・うなじより）

いま流行の肩甲骨の間や足首に入れるような無粋な単色のタトゥーではない。グレデーションの効いた極彩色の和風の刺青である。抜いた襟元に少しだけ覗いた刺青なのである。作者はそれを見逃さなかった。

上五の「……に」が巧妙である。普通ならば「……に」は説明的と批評されるところだが、この「……に」は作者が「……に」見つけたという意味を省略している。この「をんな」が刺青を「入れている」を省略しているのではない。中七においても「をんなの刺青」と表現していない。上五の「……に」と中七の「……の」の助詞の配置が絶妙なのである。スーッと出てきたようなフレーズだが、確固たる構成が行き届いた作句なのである。

この「をんな」確かに姐さんである。夏の帽子をコーディネートしているので、和風ではなくて洋装かもしれない。大正ロマンのような、身にゆったりとした服を風の様に纏った女性であろう。だからこそ刺青が覗いたのである。作者は筆者の知り得ぬ体験の年輪を有しておられる。どうにかあやかりたいものである。そうすればよりこの句に迫れると考える。他に「春菊や仲居に世辞の二つ三つ」がある。

背伸びするほどどこか乱雑立葵　堀之内長一

（『俳句』10月号・ちっち蟬より）

この作家の句はいつも何処か映画のラストシーンのような感じを受けるのである。または小説の中の名句を抜き出したような感じを受けるのである。だからと言って散文の抜き出しではなくて、その一句で映画全体を想起できるということである。小説の代名詞になっている一文であるということなのである。重厚であり、且つ十七音になった軽妙さのバランスの行き届いた作句である。他に「古稀と書き獅子座の男猫のよう」がある。

ひとつづつ灯ともりてゆく夜の秋　雨宮きぬよ

（『俳句四季』10月号・巻頭句より）

発出した呟きがそのままに一句になっている。そういう作家なのである。こういう作家は朝起きた時から、夜に就寝するまで俳人として行動して生きておられるのであろう。生活そのものが俳句に成っているのである。もしかしたら、眠り

方さえも俳人のそれであるかも知れない。彼女の書いたものは皆、俳句なのである。

作為を感じさせない句である。しかしながら、句意が読者の心へ確実に届いている。叙景しただけの句ではない、中七の「ともりてゆく」ほ本来人為であって「ともしてゆくの表現」であろう。句の「灯」の自動詞的な表現が、作者の把握した景なのである。他に「施餓鬼寺赤子の這うてきたりけり」「秋夕焼電池二つを買ひにゆく」がある。

いつせいに初霜光り出す野面　梅澤佐江

（『俳句四季』10月号・風の見える道より）

切り出したままの「野面」石が、「初霜」によって光り出したのである。「初」を愛でる俳句ならではの感慨であり、感傷である。水明の俳人であり、通常は感情をダイレクトに表現することが多いように感じているのだが、掲句は感情を極力抑えて、感傷をためた作句になっている。

鈴虫やいつのまにやら紐殖ゆる　鈴木多江子

（『俳壇』10月号・鈴虫より）

「紐」が増えるのである。帯留もしかり、日常ならば包装紙を留めている紐も然りである。「紐」はある意味で人間関係の柵とも捉えられて、意味深な句である。

この夏の何処かに戦火酢に噎せる　小林　実

（『俳壇』10月号・何処かにより）

「酢」は啜ると噎せる。夏には欠かせない食材ではあるのだが、その食べ方に拠っては、食べづらいこともある。このような譬えの微妙な表現の中に「戦火」というシリアスな題材を入れ込んでいる。作者は、結社「遊牧」に所属の俳人である。主宰塩野谷仁氏は、「真面目に俳句に取り組んでいるとこういう句が出来る」と仰ると思う。

地球儀のどこも継目や鶴帰る　堀田季何

（『俳句界』10月号・特集40代俳人より）

確かに地球儀の面は球面であって印刷した地図が猫目を縦にしたような形のものが十六分割もしくは大型のものになると二十四分割かそれ以上の張り子のようになって成り立っているのである。紙風船のそれである。その継目を越えて鶴が帰るのである。その軌道を作者は地球儀に見ているのであろう。他に「歪みつつしやぼん玉デモ隊の上」がある。

座五の季語「鶴帰る」は春の区分に入る季語である。もしかしたらシベリアでは日本へ越冬に行くのを「帰る」というかも知れない。あくまでも季語は、日本の空間で考案されたものなのである。

コスモスや花弁のひとつ落とす老い　川崎千鶴子

（『俳句界』10月号・竜胆の恋より）

上五の季語「コスモス」の花の終末を叙している。自然界の、たぶん自らの老いへの確認が認められる。哀れというよりも覚悟であろう。死への覚悟は年齢を重ねて生きることへの覚悟に転換したようである。他に「家流れ妻子も流れ月と寝る」がある。

『水明誌』を繙く（水明十月号）

羽村美和子（『ペガサス』代表「豈」「連衆」同人）

病葉や一位の葉には骨がある（十三頁）　網野月を

「病葉」は、病気や害虫のせいで、夏の青葉に混じって赤や黄色になっている葉のことである。掲句上五に、高浜虚子の「病葉や大地に何の病ある」「病葉を振り落しつゝ椎大樹」などの句を想起したり、哀れな美しさを思ってみたりする。

それに対して「一位の葉には骨がある」の飛躍には一瞬戸惑う。確かに「一位」は針状の「葉」が羽状に並んでいるので、「骨」に似ていると言えば似ている。だがそれだけのことで掲句上五にぶつけるだろうか。

かつて仁徳天皇が位の高い神官用の笏を作らせ、その木に正一位を授けたことにより「一位」と呼ぶようになったとか。常緑高木である「一位」は林を形成することが少ない。つまり群れない。神木として祀られることが多い。材は緻密で硬く狂いが少なく、笏は勿論、装飾品や彫刻などに用いられる。

そういう木の「葉」は、変色するわけにはいかない。「骨」は言うなれば、気骨であろう。作者は、そこに気高い意志を感じている。深い教養をベースに作られた措辞だ。

掲句は、「葉」ではあるが全く違うイメージのものを巧くぶつけることでそれぞれを強調し、人の生き方を垣間見せることに成功している。

窓際のボトルシップや星流る（十七頁）　田寺玲子

「ボトルシップ」は酒瓶の中に船の模型を組み立てたロマン溢れる工芸品で、かつて船乗りが飲み終わった酒瓶に材料を入れて作ったのが始まりとされている。

今更ながら「ボトルシップ」の作り方を調べてみた。瓶に入る大きさの船を組み立ててから入れる方法、細かいパーツをピンセットやボンドを使って瓶の中で組み立てる方法などがあるようだ。後者は気が遠くなりそうだが、出来上がりの存在感はありそうだ。

帆船が多いが、コロンブスがアメリカ大陸へ渡るのに使ったサンタマリア号、「太平洋の白鳥」「海の貴婦人」などと呼ばれた日本丸、名前を聞いただけでワクワクする。

秋の夜、「ボトルシップ」が「窓際」に置かれている。青く暗い窓の外の色に、帆船の白が鮮やかだ。この景が良い。そこへ「星流る」。あたかも銀河への航海を誘っているかのようだ。夜は更けていく。流れ星がまたひとつ。やがて「ボトルシップ」もボトルを抜けて、銀河を航行し始めるに違いない。

非常にシンプルな作り方だが、「星流る」の季語の斡旋により、大きな詩的空間を創り出している。

山本鬼之介　選

水明集

さいたま　塩野久子

秋ともし地唄流るる出で湯かな
病む友へ届けたき声月鈴子
水屋の葉掬ふ女や秋袷
草花に惹かるる女心こぼれ萩
秋茄子の色を保ちつ糠漬す

渋谷きいち

秋なすび我が子のごとく尻を撫で
魔法の手撫でて艶ます秋茄子
銀漢や女は恋に驀地
秋灯や田舎芝居の立稽古
虫しぐれ臥せる母御の息さぐる

さいたま　曲淵徹雄

秋めくや涼やかに灯を映す水
引売りの腰手ぬぐひも秋めきぬ
一叢の雨後の昂り昼の虫
今年米家人の語る水の神
流星を見送り浸かる露天風呂

梅澤輝翠

天高くピストルの煙吸はれゆく
秋高しポニーテールが右左
秋袷白きうなじが横丁へ
高空を切り裂くごとし秋燕
音楽堂を酔はせる指揮者秋深し

笹本啓子

星月夜語り明かせし山の宿
分校のオルガンに乗り去ぬ燕
母の倍生きて形見の秋袷
厨事終へて気付きし虫の声
迫り来る蹄の音や天高し

西幅公子

育雛を果し燕の今日帰る
都市化の地ひたすら飛びし秋燕
姿見に吾が初縫ひの秋袷
はためける力士幟や鶏頭花
おんぶばつた飛び出して来る鎌の先

天空の荒城隠す夏の霧
夏の夜胴体切りの手品かな
晩夏光疲れ切つたる白輓馬
封印の話を母が星祭
花白粉留守番の子が鏡台に

秋めくや棚引く雲もゆく雲も
名画座を出でて界隈秋めきぬ
新刊の帯を外して秋涼し
海原を浜へ引き寄せ鰯網
新米を磨げばタンゴのリズムかな

秋の灯や傘寿の運命線二本
流星や耳に女の嘘ひとつ
次の五輪を観て死ぬ覚悟虫しぐれ
「清張」の本に栞を虫の闇
名月や女将の嘘も心地よく

駄菓子屋の婆の暗算夏休み
待ち伏せのかなぶん壁に体当り
西洋朝顔軒下までの解放区
鬼灯や口遊ばせて独りぼち
地熱吸ひ鬼灯夜叉の目となりぬ

さいたま　保坂翔太

上尾　横山君夫

さいたま　新　暦文

本橋稀香

秋の草転(ぐるり)をすれば万華鏡
天辺の鵙の高鳴き森を統ぶ
仲秋やオペラグラスを調へぬ
水澄むや川面を遊ぶ千切れ雲
入れ食ひも釣の醍醐味鯊日和

また一つ逝く魂や秋の蝶
蟷螂と睨み合ひたる宮大工
みなとみらいにゑくぼをつくる稲光
夜のしじま稲穂の眠る千枚田
岬への道を灯すや曼珠沙華

草の実のふくらむ岸辺風そよぐ
林道の景色一変曼珠沙華
松茸飯に顔ほころびぬ老夫婦
ジーンケリーのやうに雨月を歩くかな
兜太しのぶ秩父音頭の総踊

継承の直実節や盆踊
月の雨街の明かりを潤ませり
命名を墨で記せし良夜かな
暗闇を台風の眼が迫り来る
秋分の風に色香の漂へり

さいたま　反町　修

平塚　丸屋詠子

東京　鈴木和子

熊谷　越田栄子

山肌に沿ひし石仏雨の月
灯点され雨名月の渡し舟
忘れたき過去の有りなむ秋の風
台風が奪つてゆきし過去無限
台風の心変りの町明り

熊谷　神田治江

歌ひ手の替り佳境や盆踊
踊りの輪手練れ師匠が先に立ち
乗りのよき八木節音頭盆をどり
ゴスペルのかすかにきこゆ台風過
颱風過風の又三郎いづこ行く

高崎　原田秀子

背を正し永字八法秋燈下
己が身を己が油で焼く秋刀魚
秋刀魚喰ふ人妻恋ふる詩のありし
霧の海小諸馬子唄近くより
裏山へ泣きに行きけり秋茄子

さいたま　染谷正信

長唄の師匠掲ぐる秋簾
異国語の人ら見上ぐる三日の月
出荷待つ新酒の樽に化粧縄
四阿の静けさ破るばつたんこ
コスモスやエスエル通る日曜日

橋本京子

いささかな陰あるをんな蚯蚓鳴く
開けちやだめパンドラの箱蚯蚓鳴く
指折りてこきと鳴る音秋高し
秋高し思はず唱歌口ずさむ
着信に胸のざわめき星流る

さいたま　元田亮一

料亭のつくばひの月所在なげ
能楽堂万媚の所作や秋の暮
秋旅や山河肴に所酒
山栗の炊き込み御飯お裾分け
自販機に住所あるらし鰯雲

清水桂子

秋彼岸疎開地にある父母の墓
遺言や母の故郷の菊畑
広々と本家の墓域菊香る
式典や秋の彼岸の大伽藍
菩提寺より枝豆届き仏前に

杉戸　佐々木史女

曼珠沙華何やら黄泉の風情あり
夕映にさらに華やぐ曼珠沙華
しべ長き曼珠沙華散る火花かな
婚約の佳き日に似合ふ松茸飯
民宿の窓より望む蕎麦の花

さいたま　山岸久美子

送火やなぜか淋しき寺の空
焙烙を真新しくし送火す
赤まんまままごとの葉に五粒ほど
乙女座の妻と黙して虫の夜
空ぬけて鳥はどこまで秋彼岸

さいたま　新井孝麿

故郷の星降る街や三日の月
摩周湖の水面に浮かぶ三日の月
拝殿の長き廊下や三日の月
荒屋の窓に斜めの秋簾
化粧してねぢり八巻秋御輿

千坂平通

秋めくや本の表紙にひさし髪
秋めきて花簪のしろうさぎ
唐破風の銭湯出でて虫の秋
太刀魚の背びれ刃文のごとく揺る
太刀魚の青き光の立ち姿

川崎　鈴木玲子

秋簾巻きて望むや嵐山
讃美歌の洩るるチャペルや蔦紅葉
シスターに辞する夕べや蔦の門
秋高し眼下に光る広瀬川
蔦紅葉猫と行き交ふ谷中墓地

さいたま　加藤でん治

姿見やいまだ着慣れぬ秋袷
雁木通高く低くを帰燕かな
下駄の歯の二の字の窪む白露かな
語り部に引き込まれたり夜半の月
天高し朝一番の深呼吸

さいたま　竹澤和子

さりげなく地方紙詰めて今年米
鳥居三つ長き参道秋めきぬ
細石鎮座に飽くや秋めけり
わが町もベッドタウンや小鳥来る
舟舫ふ水面を渡る風青し

春日部　仲田利子

出し抜けにつくつくし鳴く散歩道
碇星大海原の船守る
鋏持つ子を抱き上ぐる葡萄狩
冷静を取り繕ふや秋扇
旅立ちの間際に上がる秋雨かな

さいたま　岡田宣子

つまべにを褒めて手渡す回覧板
三線に酔へる島人鳳仙花
秋灯や切粉の跳ぬる町工場
傘傾げ会釈を交はす花野路
秩父路に萩の風吹く七曲り

森美枝子

新米に金釘流の送り状
新蕎麦に命与へる水まはし
新蕎麦に店主能書き添へて出す
捨案山子今年が限り峡の空
満願の寺の参道蚯蚓鳴く

伊奈　菅原卓郎

お囃子の賑はひ何処今年米
駅弁の山野の恵み秋めける
秋めくや恩師の訃音胸塞ぐ
妖艶な襞を顰むる鶏頭花
絵手紙で凌ぐコロナ禍秋海棠

春日部　諏訪サヨ子

四阿に辿り着きたる秋の蝶
杣道の祠崩れて蔦かづら
誰の所為貴方を泣かす後の月
昼の月眺むる奴が気に掛かる
竹林をぬけくる風のさやけしや

さいたま　飯田忠男

山の辺の旅の始まり花野道
風はらみ遠く波打つ花野かな
秋の蝉村の古りたる塞の神
秋の風今日から変はるお品書
秋めくやショーウィンドウの赤い靴

草加　外村紀子

目醒むれば今宵の月ぞおはしける
満月や白きハイウェイ空に入る
沢登り宙に止まる鬼やんま
蜻蛉の飛び立ち腕の軽さかな
秋草のなびく城址に能舞台

さいたま　小林京子

鳳仙花茅葺きの家今は無し
年近き叔母とままごと鳳仙花
明日有りとつまくれなゐの弾けとぶ
大漁旗引き連れてくるうろこ雲
大漁の海を見下ろすうろこ雲

さいたま　小駒さち子

桔梗の野にあり野にはおぼれずに
苦しみに似たる愛あり秋袷
燕が帰り落日の空広がりぬ
去る燕大海原を眼下にし
万国旗下りて秋思のパラ五輪

川田政代

早口の願ひ置き去り流れ星
夜長し丹下左膳をモノクロで
つくのなら大嘘にして寝待月
乱れ萩叱られし子の頭撫で
恋の実も今は子宝西鶴忌

吉川　杉浦理恵

衣被旨し大野や城聳ゆ
自由形不自由でも金秋涼し
コスモスや乗合バスのランドセル
マドンナはいつも二両目秋桜
大漁待つ秋の桟橋若き妻

小浜　松島寛久

葛の花かつて牛舎のありし所
いつの日かひとりになる身冷奴
秋声や裏木戸口の暗きより
新涼や指しなやかに薬剤師
星流れ直ぐに呟く願ひ事

若狭　山﨑郁子

画数のよき名を硯洗ふ朝
やうやくのバスの灯かりぞ霧の村
田舎家の太き柱や衣被
色鳥や旅の話をしませうか
ひぐらしや煙たなびく谷の村

檜鼻ことは

国境にキャラバンサライ鰯雲
刈り萱を燃やす兵士や国境
渡り鳥見上ぐ国境検問所
秋日和笑ふ双子のバギーかな
違へずにあの日の此処に曼珠沙華

伊予　向井章子

稲刈やあたり一面休耕田
虫の夜や音消して去る救急車
七つ八つ夕日を返す石榴の実
遂に媼のみの館ぞ敬老日
敬老日親指ほどの萩の餅

横浜　山岸弘子

甘露煮の潤(ほと)ぶる鯊や田舎膳
衣紋掛に色合ひ深き秋袷
温泉街を下れば海や秋の声
鶏頭花名残りの赤の拳大
語らへば胸通り行く秋の風

さいたま　菅原真理

丹波篠山秋に行きたき城下町
坂下門をくぐり皇居の紅葉狩
水引草やさしく触るる東慶寺
慎ましく秋の袷で顔合せ
黄金の揺るる田の上を去る燕かな

森下美智枝

月の雨不思議とすすむページ数
小砂利踏む下駄のリズムや盆踊
踊太鼓山から響き村中に
惚れ惚れす男衆(をとこし)揃ふ踊笠
窓際にせめて団子を雨の月

緒方みき子

野の寂を破る虫の音歩を止む
晩酌や何より佳きは虫の声
秋灯や今宵読む書を探したり
秋の灯や人恋しくて長電話
野菊など摘めば少女の日へ還る

さいたま　篠崎紀子

茶の所作の稽古厳しや白桔梗
本堂の木魚聞こゆる秋の暮
啄木の新婚の家虫すだく
爽やかにピアノ弾く君初恋よ
西陣の庭爽やかに機の音

野村美子

秋爽や空にせせらぎ置く梢
鈴の音のさやけき店やフランスパン
この辺り風待つやうに水引草
「ひようたん島」の見ゆる海釣り鯊の秋
月明し繭倉しばしミニシアター

越谷　阿部幸代

炊き上ぐる匂ひ楽しむ茸飯
曼珠沙華燃えて燃えたる背くらべ
曼珠沙華風の行く手に夕日影
思ひ出の器に盛りし茸飯
天界の讃美に応へ曼珠沙華

さいたま　遠西勢津子

蚯蚓鳴く澱の溜りし赤ワイン
異界へと呼ばれてゐるや蚯蚓鳴く
野に出でて深く息する天高し
軽やかに小さき蟋蟀の飛び交ひて
秋の野や赤紫の混じりをり

さいたま　岡田芳春

天高し溜息ついてリラックス
細身かな秋刀魚の煙棚引かず
秋つばめ飛行機雲に紛れ行く
秋燕や軒から落つる羽根もなく
擦れるほど着付け習ふに秋袷

小川洋子

秋めくや女将の帯の亀甲紋
蕎麦の花古女房の割烹着
主なき時計動くや秋ともし
秋うらら老犬と行く老夫婦
いわし雲見上げ棒立ちおねしよの子

池田珪子

虫時雨街灯ともる緑地帯
天高しホームへヘッドスライディング
秋晴や子に起こさるる日曜日
新生児祝ふ三代小鳥来る
全校生一所で給食小鳥来る

斎藤みよ

満月や露天湯の華纏ふまで
酒を締め友見送りぬ碇星
色つきの歓声弾む葡萄園
山間の棚田眺むる曼珠沙華
寺裏の蜻蛉飛び交ふ小塚かな

さいたま　秋谷風舎（信一改め）

順番に踊櫓へ三姉妹
月の雨貨物列車の続く音
朋友に続きて真似る盆踊
城壁めくビルの林立雨の月
譲り合ふ狭き路地裏月の雨

東京　飯室夏江

暮れなづむ富士をまつすぐ吾亦紅
旅立ちは二畳の個室吾亦紅
少年野球の歓声近し獺祭忌
獺祭忌明日はどの丘越え行かむ
裏山のゆるき登りや吾亦紅

山下ユリ子

赤とんぼ緋色で描くらせん形
端正な文字書く友の逝き晩夏
新涼や花の世話して一日過ぎ
墓洗ふ父母の好きな梅ぼ志飴
山の宿竈の隅でちちろ鳴く

畑宮栄子

チャルメラの音の恋しき夜なべかな
虫すだく空地にビルの建つ報らせ
いとまなく花の落ちたる木槿垣
星月夜金門橋を独り占め
戻り梅雨天窓叩く雨太し

鈴木藻好

ひつそりと二人住まひや秋海棠
酒蔵の名水自慢秋気澄む
台風圏携帯電話電池切れ
人探す町内放送厄日かな
知らぬ間に庭に紅白曼珠沙華

いすみ　平石睦子

ましら酒杣人腰の鈴鳴らし
杣人の猿酒見付けご内密
空蒼く萩は盛りの忌日かな
萩の風入れて句会の始まりぬ
お隣の猫が又来て萩日和

森　和子

文を焼く熱き思ひ出彼岸花
杖つくも薄く紅引き敬老日
ままごとのご飯は萩のこぼれ花
面会の叶はぬ窓のちちろ虫
腹這ひで蟋蟀追ふや四畳半

和歌山　嶋田洋子

夜仕事の眼閉づれば闇の音
星月夜沖に漁りの灯のひとつ
木槿散る茜の空に黒き富士
山小屋にランプが一つ星月夜
得意気な虫の音ひとつ床の下

秋の灯や指たよりなき電子辞書
秋灯や友へ絵手紙ガラスペン
起きて先づ七時のニュース朝の虫
月ほそき空の下なる虫時雨
メニューが多し主婦の味方や秋茄子

肩を寄せ神話の世界カシオペア
沼杉とかな女の句碑や秋の空
独りぼつち夢見心地の花野かな
初取りの出を待つ楽屋秋の星
秋思の瞳してゐる美人「夢二」の画

廃屋に至る石段カンナ燃ゆ
園児らの繋ぐ小さき手カンナ咲く
身に入むや新の卒塔婆の独壇場
ワクチンの会場静か終戦日
行く秋や足取り重き抜歯の日

さいたま　湯浅　和

鳴海順子

綿貫ひさの

山戸美子

鮮やかな父母丹精の雁来紅
ハンバーガー頬張る元気敬老日
籠りたる家族で祝ふ敬老日
孫の画く似顔絵若し敬老日
シャインマスカットでんと置く祝皿

空蝉の落ちて夕日の中にをり
雨後の庭第九のごとき蝉時雨
秋の蚊に二度も逃げられ逃げられて
欠伸して残暑の庭を通る猫
西瓜買ひ重さに疲れあと寝入り

ワンピースは黒の水玉街は秋
家計簿の少し黒字に秋の夜
テーブルに飾る黄菊や誕生日
野歩きの愛しきひと日吾亦紅
店先にフルーツあまた獺祭忌

新聞の訃報欄見る敬老日
蒸し藷を食べて散歩や接種済
弱き目に両足太き秋の虹
草の絮母似の背は髪丸め
五階にて感ずるあれは虫の声

蕨　細井良子

さいたま　水野興二

高原和子

和田仁八郎

秋結城裾の絹擦れ所作の風
軽やかに着こなす女将秋清か
長電話久しく交はす秋の夜に
灯を消して戸外何処ぞ虫の闇
水道水きらりきらりと今朝の秋

東京　河原叔子

肩の小屋友と見つむる碇星
露天風呂頭上に光る碇星
秋彼岸田舎のもてなし出汁の香や
手を伸ばし鋏を入れる葡萄棚
硝子器に葡萄盛りたる誕生日

さいたま　木村るみ子

釜の焦げ奪ひ合ひなり茸飯
許しませう忘れませうぞ曼珠沙華
曼珠沙華咲き満ちてなほ物寂し
ふたつ世に句読点うつ彼岸花
供へたる松茸飯や膳に下げ

川口　新井のり子

白さとは無垢と妖なり白小百合
切り口に滲む藍色秋茄子
喜々とせし子らの指先つまくれなゐ
手筒花火力をこめし足袋の指
忍びよる子を捉へてるトンボの目

さいたま　奥山粉雪

滝音のまはりの樹々を震はせて
滝しぶき顔いつぱいにはしやぐ子等
立葵空へ空へと咲き昇る
「久しぶり」声のはづむや立葵
ボサノバのボリューム上げる街の梅雨

さいたま　後記朝香

名月を酒の肴に夢心地
赤とんぼ夕焼け雲に吸ひ込まれ
朝の庭秋の足音すぐそこに
深山にかなかな鳴くや秘湯の湯
金木犀午後の紅茶も琥珀色

石浜悦子

秋暑し産土神の碗の水
秋暑し伊達な仕草の将棋指し
秋刀魚煙る一膳飯屋の頑固爺
爽涼やレモンサワーの小さき泡
平林寺の古木の空ぞ鳥渡る

霜多光代

夢の中母の背できく里の秋
まんじゅしやげ磔刑のごと列をなす
栗飯や九人家族でありし日も
秋桜秘めごとひとつ悔ひとつ
早咲きの水仙一本耶蘇の墓

藤岡　青木紀子

金木犀香る窓辺に絵筆執る
三十号の油彩描き終へ上弦月
野分中電話の孫の声嬉し
満月や少女三人の影法師
主無き庭を静かに月照らす

宮代　関谷多美子

蜘蛛二匹一つ巣に居り天の川
露のせて狭庭の茄子や一二三
被綿（きせわた）や昔人の智恵露堂堂
彼岸花咲きかた順番あるを知る
お隣のお人柄なり柿甘し

藤沢　小島喜代子

猿酒に酔うて芝居で物申す
猿酒の味に魅せられ踊る村
萩誇るそつと切り取り頭下げ
七転び八起きの活でましら酒
懐かしや母かつぱう着萩の香を

さいたま　落合和枝

雪女秋田こまちのべにうすし
ふるさとは遠きにありぬ雪催
恋しくて傷を負ひたり冬薔薇
思ひ出の入口に立つ古日記
冬帝のマラソン人の頬たたく

所沢　関根千恵

独り居に秋刀魚一尾をもて余す
のちの世も隣り合はせや墓洗ふ
倒木の先は湖底に白露かな
秋刀魚焼く気まぐれ猫のそつぽ向く
通り抜け禁ずる貼紙野分あと

さいたま　田中泰子

今朝の秋とんだ箇所から捜し物
天高し兄弟校の決勝戦
敬老日タクシー券の届きをり
秋すだれ昭和の匂ひ醸しだす
神神しく八年ぶりの満月に

和歌山　髙橋満耶子

弁当に葡萄二粒鎮座せり
みつしりと重き葡萄の自尊かな
曳かれ行く牛の眼や黒葡萄
カシオペアひとつ足りない背の黒子
長き夜の揺り椅子モルトサラヴォーン

さいたま　横山礼子

暴れ枝さてと刈り込む百舌鳥日和
手を止むる剪定鋏百舌鳥の贄
鵙猛るにげろやにげろ蜥蜴の子
星流る戦禍の消えし世になれど
流れ星待つ静寂に子のいびき

北出久美子

門前のみたらし団子秋彼岸
秋分やスイッチバックの電車にて
地を蹴りてシーソー高く秋分の空
星月夜内外で犬ら鳴き交はし
待宵や留守番猫の甘え鳴き

東京　山中いちい

縁台で唄ふ親子や星月夜
天上の夫を想ふや星月夜
住職の話相手の紅木槿
母からの急な頼みに夜なべかな
店あかり消ゆる裏口虫の声

さいたま　武田重子

晩鐘を聞きつつ炊くや茸飯
いつの間に空地を焦がす曼珠沙華
見事なり子等が描きし曼珠沙華
持ち寄りて話花咲く茸飯
近頃は孫にすすめし茸飯

川口　田村福美

かな女忌や教へ給ひし師の心
小鳥来る朝な夕なに友連れて
田一面身の丈越すや狗尾草
桔梗や白青清楚に天得院
残暑厳し決勝戦の球児の涙

和歌山　南條きわゑ

天高し流るる雲へ指てつぽう
燃えたちて日陰に揃ふ曼珠沙華
けんかして折つて畳んで秋日傘
天高し大小の靴つるし干す
校庭に白線引けば秋高し

さいたま　安藤みえこ

反照の狭間に金魚浮き沈み
蚯蚓鳴く畷に煙る銀の糸雨
秋高く待ち侘ぶる恋運び去り
小鳥来て喧騒の後の駅灯り

草加　持永喜夫

秋祭り白足袋ぬいで終りけり
虫時雨昭和と共に遠のけり
板塀の庭にこほろぎ一家あり
パラの秋ボッチャのメダル大感動

さいたま　川村　治

蚯蚓鳴く茶を飲む老母の太き指
蚯蚓鳴く夜泣きする子を負ふて庭
口までも浸かる湯船や蚯蚓鳴く
秋高し筋トレしだす六十路の吾

橋爪さなえ

雨上がり群青色の空高し
手を止むる夕げの仕たく蚯蚓なく
大き胸借りしけいこや秋日和
商談の長き時間や秋日和

萩の花四方八方乱れけり
秋海棠手折りぽきんと音したり
川霧や工場群の浮かびたる
木犀や道を染めたる金の粒

暗涙にぼやけて見えぬ碇星
袋から透ける葡萄の黒緑
北窓の揺らめく光カシオペア
月代や遠出の闇に影合はす

炎暑中パラリンピックの雄叫び
雨上がり一斉に泣く蝉の声
うとうととコオロギの声夢の中
見沼田や案山子の肩の群れすずめ

名月や見上げる空よいつまでも
裏庭の色づき初めなつめの実
赤とんぼ誰を待つのか日暮時
夕暮の笑顔はじけてざくろかな

さいたま　川島夕峰

鬼石　榊原聰子

さいたま　樋口元美

福田育子

鬼石　加藤ナヲ子

星月夜たれか訪ねて来るらしき
彼岸花有縁無縁のよすがあり
話すこと聞くべきこと多々秋彼岸

善意なる傘は尽きたり秋の雨
バイエルの暢気な音色小鳥来る
小鳥来る樹を仰ぎ見て遅刻の子

焼酎水割り三杯蚯蚓鳴く
喘息が鳴りを潜めて秋高し
胸張ってテープ切る孫爽やかに

秋暑し座頭鯨の飛び跳ぬる
小無花果小物に宿る生もあり
山国の風花に足踏み入れる

秋高し古道の先に梅うどん
秋高し鯛焼き誘ふ狭山茶なり
秋の日にカーテン洗ひて胸ひらく

小僧また薪割る夕や法師蝉
種茄子や取り上げ婆は今米寿
母逝かれ意気消沈す墓へ菊

さいたま　小山敦子

大阪　遠藤人美

さいたま　竹内万美

吉川拓真

山川　順

小川　藤間友二

作品評

山本鬼之介

水屋の葉掬ふ女や秋袷　塩野久子

水屋とは、神社や寺院で、参詣者が手や顔を洗うために、鉢を据えて常時水を湛えた屋根付きの建物で、参詣の前に先ず其処に立ち寄ることで気持が一新する。

この一女性は、水屋の水を使う前に浮いていた木の葉を取り除いたのであろうが、「掬ふ」と「秋袷」との言葉の連携によって、容貌と身の熟しの優美な女性像が浮かび上がってくる。作者の住まいに近い武蔵一宮氷川神社での実景と思われるが、価値ある女を演出する「水屋」を表したことで、生き生きとした俳句になった。

虫しぐれ臥せる母御の息さぐる　渋谷きいち

かなり高齢のご母堂と同居の作者であるから、日々母上の健康状態に気を配っておられることと思う。庭で秋の夜を盛り上げる虫時雨がたけなわの時刻、就寝中の母の口元に掌をかざして呼吸を確かめている様子が見て取れる。老母を気遣う作者にとってのおさめの日課の静かな所作である。

一叢の雨後の昂り昼の虫　曲淵徹雄

夜を待てずに土手の草叢で鳴いていた虫が、折からの雨で鳴き止んでいた。それが、雨が止むと同時にまた鳴き出した。作者にとって、その音が雨の前より一段と大きく高く感じられたのであろうが、雨上がりを悦ぶ虫の心が反映したのかも知れない。

音楽堂を酔はせる指揮者秋深し　梅澤輝翠

芸術の秋たけなわのコンサートホールの一情景と見た。句には書かれていないが、野外音楽堂であれば、季語とあいまって、その実感がより深まるのではないかと思う。何れにしろクラシック音楽の愛好家を納得させる名指揮者であることが明らかである。演奏会が終了した後も、聴衆は耳の奥から湧き出てくる曲の余韻にうっとりとしている。

分校のオルガンに乗り去ぬ燕　笹本啓子

分校や廃校が俳句の素材としてよく使われるが、其処で弾かれているオルガンを出したことで、分校を単なる建物としてではなく、心を持つ生き物のように捉えたことで妙味のあ

る俳句になった。春になって渡ってきて、子を産み育てて秋になって南方へ帰って行く燕の無事を祈っているかのような哀調を帯びたオルガンの音色である。教師の弾く曲に合わせて歌う生徒の眼が、帰燕の姿を確りと捉えている。

姿見に吾が初縫ひの秋袷　西幅公子

掲句の初縫ひの「初」は、新年を意味するものではなく、生まれて「初めて自らが縫った」という意味であると解した。素人考えで、浴衣ならともかく、秋袷のようなちゃんとした着物を縫うにはそれなりの技量がなければ難しいことかと思う。それだけに、着物を縫い上げた時の歓びは一入であろう。等身大の姿見に、初縫いの着物姿の前面を、後ろを、そして、斜め横をと、満遍なく映してうっとりしているその人である。

花白粉留守番の子が鏡台に　保坂翔太

近くに家人が居ない隙を狙って、女児が鏡台の前に座って母親の化粧道具から口紅やファンデーションなど、いろいろ取り出し、母の化粧を真似て自分の顔に塗りたくり、お化けのような顔になって母親や家族をびっくりさせることがある。幼心にも美しくなりたいという女性心理が働くのであろう。本句はまさにこれから始まろうとしているその場の実景を物語っている。

季語の斡旋が直接的過ぎるようにも思えるが、読者に季節感を伝える庭の雰囲気と見ればよかろう。母親の留守を狙っていた女児のしたり顔が見えてきて面白い。

新米を磨げばタンゴのリズムかな　横山君夫

無洗米が流通している世情であるが、飯を炊くという概念は、先ず米を磨ぐことから始まるものだと思う。そのように考えると、この句はなかなか味がある。「ジャッチャッチャッチャ」という切れの良いタンゴの曲を口遊んでいると、そのリズムと米磨ぎのテンポとがぴったり合ってきて、なるほどと合点した。作者の実体験したのだろうか。

「清張」の本に栞を虫の闇　新暦文

現代物・時代物を問わず推理小説の第一人者の座を未だに守っている松本清張の小説である。脚本となったテレビ映画を時々視聴しているが、本を読んでの興奮度には適わない。文字には表されていない言葉、いわゆる行間にある「間」の働きが為せるものであろう。

一気に読み進んだ眼の疲れを癒そうと本に栞を挟んだ時、庭の闇の中で集く虫の声が耳に入った。

駄菓子屋の婆の暗算夏休み　本橋稀香

昭和二十年～四十年代には、町の所々に自宅の一角を利用した駄菓子屋があり、学校帰りの子供で賑わっていた。今のような学習塾など存在しない時代で、学校の授業が終わると、せいぜい算盤塾に行くくらいで、ほとんどの子が外で遊ぶのんびりした時代であった。本句の駄菓子屋も婆さんも実に懐かしい。歯の抜けた口をもぞもぞ動かしながら、僅かな売上金の計算をしている婆さんの暗算がいじらしくもあり、また、あやしげでもある。買手の子供の暗算の方が早くて正確なのである。筆者も婆さんの暗算にごまかされた一人かもしれぬ。

水澄むや川面を遊ぶ千切れ雲　　反町　修

人間や獣・鳥などと同様に、一群から離脱して孤独に流れて行く雲を見掛けることがある。この句の雲も同様で、田畑の間を縫って流れる清らかな川の水面にその姿を映している。一見淋しそうだが、雲なりに自由を謳歌しているのだろう。

みなとみらいにふくぼをつくる稲光　　丸屋詠子

正式名は「横浜みなとみらい21」で、横浜市西区と中区の海沿いの工業地域に、「みなとみらい21計画」による再開発で作った街区である。ランドマークタワーをはじめとする高層ビル、各種ショッピング・ゾーン、大型ホテル、横浜美術館などがある。一九八九年（平成元年）の横浜博覧会以降に当該地区の開発が本格化し、現在に至っている。

山岳地帯や田園地帯とは全く環境を異にした超近代的な街の空に発生した稲光を詠んだこと、さらには、稲光が顔に見立てた「みなとみらい」に靨（笑窪）を作るという発想が実に愉しく、夢のある俳句になっている。

ジーンケリーのやうに雨月を歩くかな　　鈴木和子

掲句は、一九五二年に公開されたアメリカのミュージカル映画「雨に唄えば」の主役男優ジーン・ケリーと、その映画のタイトルと同名の主題歌、そして映画の雨のシーンを題材にしたものと思う。おそらく作者のうら若き頃に観た映画を想い出しての作句かと想像するが、「雨もまた佳きかな」の俳句魂を見事に表明している。

命名を墨で記せし良夜かな　　越田栄子

子が生まれて七日目の御七夜の祝に名前を付ける。その名前を所定の用紙に墨で書いて披露する。いわゆる命名式であるが、用紙は、正式には奉書紙を、略式では半紙か色紙が一般的であるが、近年では多種多様の命名紙が市販されている。

さてさて、中秋の名月の夜に記された新生児の名は。普通の感覚では読めないキラキラネーム大はやりの昨今での興味津津の俳句である。

台風の心変りの町明り　神田治江

台風の予報も、気象衛星の働きによって、昔に比べて正確度が格段に進歩したが、時として、その規模や襲来時間などに狂いが生じることがある。予報通りに万全の対策を講じていたら、あっけなく通過してしまったこともあった。この句は、そうした状況を言っているが、気まぐれな人間に見立てた「台風の心変り」が面白い。

歌ひ手の替り佳境や盆踊　原田秀子

盆踊の歌は、殆どがカセットテープによるものだが、昔と同様に、その土地の喉自慢の男女が出て、地声の歌を披露する処もある。この句はそうした熱っぽい盆踊の情景を詠んでいる。本日のエースが登場し、いよいよ佳境を迎えた盆踊りの夜である。

裏山へ泣きに行きけり秋茄子　染谷正信

物語性の濃厚な俳句であるが、筆者好みの俳句でもある。誰が、如何なる理由で泣いているのか、泣かせたのは誰なのかなど、幾つかの問いが出てくるが、読者それぞれの答を愉しむのが作者の目的ではないかと思う。季語の秋茄子から導き出される答としては、姑に苛め抜かれた嫁が、家の裏手にある山に入って忍び泣きしている景である。現代の社会情勢を逆さにした諧謔であろうと察したが……。

コスモスやエスエル通る日曜日　橋本京子

秩父鉄道が、秋の観光シーズンの日曜日に走らせる蒸気機関車かと思うが。線路の脇に咲いているコスモスが、機関車が吐き出す蒸気と牽引されている客車の風圧によって揺れている様が想像できるし、沿道の子供達がＳＬの乗客に手を振り、それを見た乗客が手を振って応えている様子が見て取れる。実に平和な日曜日である。ＳＬの片仮名表記が、コスモスに調和させるためのものであれば、気が利いている。

いささかな陰あるをんな蚯蚓鳴く　元田亮一

「いささかな陰ある」の前にある言葉としては「好ましくはあるが」かと思うが、季語の斡旋の理由までは解明困難である。なかなか魅力に富んだ意欲的な作品である。

秋旅や山河肴に所酒　清水桂子

このような豪放磊落な俳句に出会えて嬉しい。出で湯に浸かり、旅先の山河を一望する客室で、その地の珍味を並べた本膳料理で地酒を酌んでいる。これに優る旅は無かろう。

水琴窟

（夏季競詠鑑賞）

池田雅夫

打水の仲見世通り鳩一羽　村杉清吉

浅草といえどもコロナ禍で人出が少なくなり、祝祭日であっても疎らな観光客なのだ。夏の暑い盛りに、仲見世通りの各店舗は打水をして客の来るのを待っているのである。打水でできた水溜りなどが鳩の遊び場になっているのだろう。

廃線の鉄路飲み込む夏野かな　菅原卓郎

「廃線の鉄路」と強調しているところに時の流れや寂れゆく里の悲哀が表現されている。そして、それを「飲み込む」夏草の逞しさを印象づけている。各地新幹線の開業で在来線が廃線となったところも少なくない。名勝地であっても。

どこまでも風の木道夏野ゆく　西幅公子

「木道」で思い起こすのが尾瀬ヶ原、そして、戦場ヶ原。広い湿原の中を突っ切るように木道が続いている。「風の木道」の措辞が、その広大な自然を言い表わしている。下五の「夏野ゆく」と、あえて人の動きを表わしたことに共感。

炎天下歩き切つたる東海道　斉藤みよ

江戸時代、日本橋を起点とした五つの主要街道の一つの東海道。江戸と京都を結ぶ全長百三十余里、およそ五百キロ。徒歩で踏破するには十数日かかる。その充実感が漲る。

老農の棒切れになる炎天下　榊原聰子

「晴耕雨読」という語は本来、読書人が理想とした悠々自適、離俗の生活を表わすが、晴れた日には野良に出て仕事に励まずにはいられない老農の姿が目に浮かぶ。たとえ炎天下であっても精をだす。「棒切れ」の措辞が痛々しく迫る。

炎天下誘導員の手の黒み　岡田宣子

大型ショッピングセンターや催し会場の駐車場などで車の誘導をする人々。毎日、炎天下でかいがいしく働いている。その顔や腕は黒々と日に焼けている。「日焼け」の季重なりを避けて「手の黒み」としたところに工夫がみられる。

炎天下微動だにせぬ托鉢僧　佐藤克之

僧が各戸を巡り経文を唱え、鉄の鉢に米や金銭の施しを受ける托鉢。厳しい修行の一つでもある。極暑の中を「微動だにせず」無心に経文を唱える僧の姿に深く感じているのだ。いくばくかのお布施をさせていただいたことだろう。

炎天やスカイツリーの揺らぐ影　霜多光代

日本一高い塔の「スカイツリー」。主都東京の猛暑は並大抵でない。日に強く照らされた地面は熱気で蜃気楼のように揺らいで見える。その臨場感を適確に詠み、読者に強い印象を与えている。そこに清涼感を覚えたのは私だけだろうか。

電柱の陰を取り合ふ炎天下　森　和子

日差しの強い道を歩いていると少しでも陰を求めて道の左へ右へと蛇行する。下校児であろうか、幼い兄弟であろうか。その無邪気な行動を微笑ましく見守っている。まるで炎天を楽しんでいるようでもある。これが大人であったなら……

炎天下鬼の顔なるアスリート　畑宮栄子

今夏はコロナ禍の中、東京オリンピックが開催された。各種競技で日本選手は目を見張る大活躍であった。その真剣な眼差し、表情は時として鬼の形相を呈するものであった。あまりにも過酷な暑さのために「鬼の顔」となったとも言える。

炎天や脳はたうたう液状化　杉浦理恵

滑稽さを楽しんでいいのだろうか。あるいは「炎天」の厳しさを共感すべきであろうか。などと考えを巡らせること自体で脳が「液状化」してしまいそうだ。納得するほかない。

見込みなき買ふ宝くじ梅雨明けず　寺内洋子

サマージャンボ、年末ジャンボなどの宝くじは庶民に夢を与えてくれる。しかし、いくら買ってもなかなか当たらず、「見込みなき」と諦め半分なのが大半である。「見込みなき宝くじ買ふ」として滑らかに、適切な季語につなげたい。

どこまでも夏野に続く風の道　岡田芳春

広大な夏野原を過る一本の道。いや、まてよ、「夏野に続く」のだから、夏野の外からの道ということか。とすると、本来の道ではなく、「風の道」と解釈するのが正しいのだろう。山から吹き抜ける風のいかめしさが迫ってきた。

夏野かなＳＬ走る川の風　山川　順

鉄橋を渡るＳＬであろうか。昭和の時代には、このような光景を見ることができたが、今では稀になってしまった。大胆に上五で「夏野かな」と詠嘆しているが、語順を替えるなど工夫することで句に広がりと深みが増すこともある。

「みいつけた」夏野に深きかくれんぼ　奥山粉雪

絵本のような「みいつけた」に情景がふくらむ。夏野の道を、見え隠れしながらゆく幼子の歓声が聞こえてくる。「深き」が何に係かるのかを明確にする工夫をすすめる。

網野月を　選

山紫集

鶏頭のはだかる小径試歩の杖　山岸弘子
近寄れば夜の鶏頭焦げ臭し　笹本啓子
凭れ合ふ五六本づつ鶏頭花　池田雅夫
老いてなほ旗振つてゐる鶏頭花　飛永　鼓
勇気なき者は去るべし鶏頭花　染谷正信
鶏頭は貰はれてゆく満月に　梅澤輝翠

やはらかな迷宮に入る鶏頭花　横山礼子
鶏頭が苦手で祖母を畏れけり　石川理恵
母を看るヤングケアラー鶏頭花　野田静香
鶏頭や紅きにボールはた止まる　岡野順子

――以上特選

気取屋に秘めたる矜恃鶏頭花　青木鶴城
鶏頭や年増女将の厚化粧　新　暦文
意地張るは母の血筋や鶏頭花　阿部幸代
鶏頭の紅も豊かに石畳　安倍弘夫
さざめいて鶏頭よろり雨の庭　新井孝麿
庭先の風に色あり鶏頭花　荒井倶子

鶏頭が迎へてくれる我が在所　飯田忠男
鶏頭や一族の墓続く道　石田慶子
遊び庭占めて鶏頭君臨す　井関礼子
鶏頭のメトロノームや風小僧　上戸千津子
鶏頭の真つ赤なりしも背の低し　宇田白鷺
抱人形は褐色の肌鶏頭花　内田恵子
からあゐや緋の思ひもてあらまほし　梅澤佐江
鶏頭や枝折戸ふさぎ赫く燃ゆ　大塚茂子
群れ咲けるくれなゐの闇鶏頭花　大場順子
祖母の家の畑が色増す鶏頭花　岡田宣子
鶏頭の濃き赤照るや瑞巌寺　加藤でん治
鶏頭に近づきすぎて頬火照る　川崎道子

鯉はねる庭の親方鶏頭花　川島典虎
里山の心深しい鶏頭群れ居る　河原叔子
庭の首座鶏頭燃えて雲早速し　川村　治
旅果ての残り火燃やす鶏頭花　神田治江
生くることけだるき朝の鶏頭花　木村るみ子
赤々とフリルの冠（かむり）けいとう花　熊倉千重子
鶏頭や顎鬚撫づる父もゐて　河野はるみ
片隅に置かぬ贅沢鶏頭花　小駒さち子
別珍の手触りつるり鶏頭花　越田栄子
蔵の町入陽に浮かぶ鶏頭花　後藤綾子
今日こそは本音知りたし鶏頭花　近藤徹平
鶏頭花強き日差しに頭垂れ　斎藤みよ

まぼろしの母の歌集や葉鶏頭　榊原聰子　去年より我が身の重し鶏頭花　瀬戸雄二郎

鶏頭燃ゆ月明りには静まれり　佐々木典子　皺多き脳を戴く鶏頭花　反町　修

鶏頭や隠居じいじの独り言　佐藤克之　病癒ゆ庭に燃え立つ鶏頭花　高島寛治

鶏頭を爺の頭に「ハイチーズ」　渋谷きいち　鶏頭や長引く夫の更年期　髙橋満耶子

少女抱くブーケの中の鶏頭花　下川光子　鶏頭花弓道場の鏃音　武田重子

禍も福も孕みて燃ゆる鶏頭花　菅原卓郎　鶏頭や今日の夕日は眼に浸みる　田中章嘉

転入生も日差しの中の鶏頭花　菅原真理　鶏頭や熱き血潮の燃ゆる日々　千坂平通

鶏頭花個性化謳ふ世が来たぞ　杉浦理恵　鶏頭にステージライト演歌歌手　鳥羽和風

息を呑む濃きマゼンタや鶏頭花　鈴木和子　鶏頭の衣着せたし道祖神　外村紀子

蒼天を衝く天守閣朱鶏頭　鈴木藻好　鶏頭花もつれし頭クイズめく　仲田利子

横臥して鶏頭迎ぐ子規目線　諏訪サヨ子　鶏頭や姿勢正して客を待つ　南條きわゑ

鶏頭の花束もあり農市場　関谷多美子　父母眠る墓前に赤と黄の鶏頭　西浦千枝子

ラケットを口に試合や鶏頭花　西幅公子
鶏頭の分厚き赤を持て余す　松井由紀子

鶏頭を巡らせ婆の畑仕事　野口和子
雨宿りの目に赤々と鶏頭花　丸山マスミ

鶏頭を咲かせ喜ぶ吾子二人　野平美紗子
学級の花壇鶏頭境目に　宮崎紫水

鶏頭や夢の途中で甥逝去　野村美子
鶏頭の根より焔が立ち上ぐる　宮崎チアキ

鶏を忌む落人の里鶏頭咲く　原田秀子
参拝の仁王の門や鶏頭花　村杉清吉

鶏頭の一本立ちて反自民　日髙道を
鶏頭の滚る血潮や葉裏まで　本橋稀香

鶏頭のフリルに隠す妬心かな　福田千春
鶏頭の真紅深まる日暮れかな　森　和子

のそと来て老猫膝に鶏頭花　藤澤喜久
庭先を咲くにまかせる鶏頭花　森川義子

丘つつむ一万本の鶏頭花　保坂翔太
鶏頭がまつ赤に燃える水車小屋　森下美智枝

たそがれに降り初むる雨鶏頭花　曲淵徹雄
鶏頭花桔梗朝顔花手水　森本早苗

鶏頭花昼は鎮もる野性かな　正木萬蝶
霊園の墓に番号鶏頭花　山田美佐尾

鶏頭や決意の揺らぐ十五歳　町野広子
愛憎を舞ふフラメンコ鶏頭花　山中いちい

泣きやまぬ赤子鶏頭いよ赤し　湯浅　和

鶏頭の炎鎮まり夕暮るる　横山君夫

山紫集作品評　網野月を

鶏頭のはだかる小径試歩の杖　山岸弘子

座五の「試歩の杖」に「鶏頭」は開っているのだ。「鶏頭」が通せんぼをしているのである。まだまだ覚束ない歩みの作者であるが、開るものへの抗う心、挑戦する心が髣髴としている。生きることへの確かな歩みがそこにはある。

近寄れば夜の鶏頭焦げ臭し　笹本啓子

真っ赤に燃え尽くした鶏頭に座五の「焦げ臭し」が追い打ちをかけて叙されている。むろん物理的客観性は有さない。作者の心象なのである。ただこの迫力は空想の心象ではなくて作者の確信が為せるところであろう。

凭れ合ふ五六本づつ鶏頭花　池田雅夫

聞きしに勝る叙景である。この景の切り取りは、作者ならではのものである。客観的描写によって景の把握に突き放した感が演出されているが、反対に「鶏頭花」への接近の仕方も通り一辺倒のものでは無い。

老いてなほ旗振つてゐる鶏頭花　飛永　鼓

「旗振」の様子を座五の季語「鶏頭花」に見立てているだ。しかしながら上五の「老いてなほ」は、いかにも感情移入の度合いが深い。作者の周囲の方々のご苦労の様子であろうか。もしかしたら作者自らの自嘲のことでもあろうか。このような句を作られるのは、「老いてなほ旗振」ることが嫌ではない証左である。「老いてなほ」「鶏頭花」のように真っ赤に燃え続けている。

勇気なき者は去るべし鶏頭花　染谷正信

座五の季語「鶏頭花」と句意の関係はどこにあるのだろうか？チキンな奴はとっとと失せろ！という啖呵を切っているのだろうか。いやそうではあるまい。「鶏頭花」でさえも踏みとどまっているのだと、「勇気なき者」へ意見しているのだろう。配合の句としては巧妙な句作りである。

配合には、第一に同じ方向へ同調する配合、第二に反対方向へぶつかりあう配合（二物衝撃）、第三に三次元空間的に飛びかって交わらない配合がある。第二の型は緊張感を生み出す。第三の型はその距離感や方向性を間違うと無意味句の領域に入り込んでしまう可能性を有している。読み手の視座が

重要性を持っているということである。原句はこの第三の型に相当している。そもそも『水明』誌上の句は第一の型が多い。第三の型は、長谷川零余子師の唱える立体俳句論に近いのではないだろうか、と筆者は考えている。

鶏頭は貰はれてゆく満月に　　梅澤輝翠

座五の「満月に」は「満月の夜に」という時間の設定であろうと筆者は解した。切り花にして花の主が訪問客への土産として贈ったのであろうか?…とそこまで読み進めて、「満月」が貰った張本人かも知れないと気付いた。「鶏頭」を迦具夜姫にでも譬えているのだろうか。一度ファンタジーを感じると、そちらへ読みが流されていくようだ。

やはらかな迷宮に入る鶏頭花　　横山礼子

二通りの鑑賞が出来る句であろう。第一は蜂の気分になって「鶏頭花」の中に入り込んでしまった景である。蜂にとっては「やはらか」かどうかは計り知れないが迷宮であることは確かであろう。第二は作者がラビリンスならぬ大型の花壇に入り込んで迷っているうちに「鶏頭花」のセクションに出くわしたという鑑賞である。筆者はもちろん第一を支持するのであるが。

鶏頭が苦手で祖母を畏れけり　　石川理恵

さぞかし厳格なお祖母様であったのだろう。畏怖しているのである。作者自身は「鶏頭」がことのほか好きであったのに、お祖母様は逆に「鶏頭」を嫌いぬいていた。ビロードのようで装飾過多な様が苦手であったのかもしれない。…筆者は勝手に物語を作って解釈している。その人の嗜好でその人を畏れることがあるに違いない。

母を看るヤングケアラー鶏頭花　　野田静香

中七の「ヤングケアラー」が社会問題化している昨今である。コロナ感染症拡大で尚更にニュースなどで取り上げられることとなった。子が親を看ることの是非論はともかく、就学児童や就学生徒となれば、見過ごせない事態である。

植物はそこでしか生きられないし、咲くことができないのだ。そんな現代詩をかな釘流で書いた詩人もいた。そして、その中で「鶏頭花」は健気につやつやと咲いている。

鶏頭や紅きにボールはた止まる　　岡野順子

野球かサッカーかは知らないが、受け取り損ねたボールを後ろへ逸らしてしまったのだ。そのボールは花壇の「鶏頭」のところまで来て止まった。ボールの勢いが潰えたからであるが、そのボールにはまるで意志があるように「鶏頭」の「紅(あか)」信号に反応したように作者には見えたのである。擬人法の極意のような作法である。

大村節代　選

鼓笛集

素見（ひやかし）の古本市や文化の日　綿貫ひさの
朝日影物干竿の露の玉
生粋の野良猫過ぎるゑのこ草

秋時雨庇を借りるはぐれ猫　菅原卓郎
秋行きて日ごと近寄る富士の山
外野手の声に群がるいわし雲

夕野分湯呑の肌の生白く　曲淵徹雄
起きがけに決めし山行野分晴
一歩づつわが足音を秋の山

ゴンドラの切符をにぎり紅葉山　橋本京子
日本一広き川幅秋桜
秋高し七半吹かす日曜日

一枚の刈田に村の総出かな　鈴木藻好
黒猫の瞳まんまる良夜なり
顔中の酸つぱさ檸檬噛む人よ

落つる日に鳴子鳴るなり東山道　渋谷きいち
稲刈れば遊行柳に芭蕉の句
荷をとけば稲の香へやに湯治客

レインコートが雨音奏で秋は行く　杉浦理恵
スフィンクスめく猫が添ひ寝す十三夜
秋夜の地震息子の腕が頼もしく

「バイバイ」と角曲がる子ら秋深し　菅原真理
銀杏に埋もれゆくや寺の道
秋麗の光差し込むゴッホ展

はらわたのほろほろ苦き秋刀魚焼く
虫時雨ひときは激し御成道
寛げる夫の傍ら林檎剥く

森　和子

ビル群に覆ひ被さる鰯雲
手を繋ぐ母子の影や草紅葉
長き夜の突然襲ふ震度大

岡田宣子

秋高や木洩れ日の風美しく
紅葉谷いつかの橋も見えずして
はらはらと散る桜の葉名画めく

塩野久子

濃淡や風に舞ひ散る金木犀
際立てる秩父連山秋ざくら
振つて出すサクマドロップ天高し

樋口元美

丸のまま林檎齧ればヘップバーン
「お元気ですか」アップルパイの焼ける間に
林檎なら君は芯まで齧りしを

山中いちい

朝寒の厨房明かり一斉に
厨房に明かり次つぎ夕時雨
厨房のたのもしき腕夜長の灯

山岸弘子

碇星娘自慢は程々に
古代より食す楽しみ栗三つ
花梨の実香りも漬ける母嬉し

小駒さち子

画数のよき名を印し硯洗ふ
秋澄むや研ぎより戻る花鋏
水澄むや姿勢正しく寝る魚

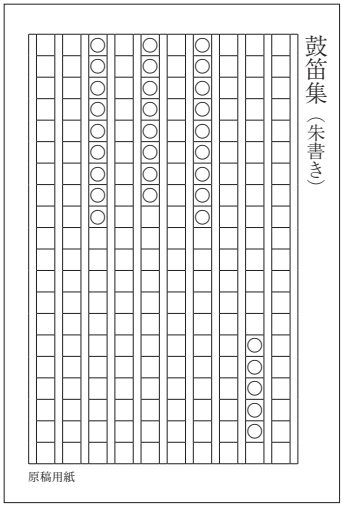
檜鼻ことは

九月尽鼓笛隊より赤紙来
鼓笛隊ベレーに止る赤とんぼ
そこはかと忍び寄る香よ金木犀

飯田忠男

鼓笛集の書き方

○俳句は四行目からお書き下さい。
○二百字詰原稿用紙をお使い下さい。



鼓笛集作品評

大村節代

生粋の野良猫過ぎるゑのこ草

綿貫ひさの

生粋の野良猫とは、野良としてこの世に生を受け、一度も飼猫になった事の無い猫の事なのだろう。面白い表現である。

野良犬は野犬狩で捕らえられる。その点、猫は自由なので野生が残っている。えのこ草でじゃらす人間を冷やかに、横目で見ながらふんと通りすぎるのである。

秋行きて日ごと近寄る富士の山

菅原卓郎

夏は積乱雲が水平に広がり、なかなか遠望がきかない。標高三七七六メートルの富士山は、夏は山梨県、静岡県でも、山頂までめったに拝めない。

ところが、秋になって大気が澄むと遥か遠くの地まで富士山が見える。秋が深まると、よりはっきりと富士山が見える。それを中七の富士山の方が近寄って来るとの表現に、より現実味を増す。

一歩づつわが足音を秋の山

曲淵徹雄

秋の山は、あたりが静寂に包まれ、行き交う登山客も少なくなる。静けさに包まれた山を、自分の過去と行く末に思いを馳せながら、一歩また一歩刻む。

鼓笛集巻頭（十一月号）

私の好きな一句（自句自解）

斎藤みよ

身に入むや病の母へ笑顔見せ

五才児のいる嫁が入院し、私が泊り掛けで手伝いに。最初は「ママ…」と泣くので「泣いていたらママは元気になれないよ。笑って笑って」と励ましました。翌日からは笑顔で病室の母親とオン・ラインでおしゃべりをしていました。心に残った思い出です。

いかがですか
「俳句日めくりカレンダー」

令和四年の「俳句日めくりカレンダー」の三六五句の中に、鬼之介の句が選ばれました。しかも、掲載されたのが何と、八月一九日です。皆さん、この日が何の日かわかりますか。

〈俳句の日〉なのですよ。さらに、掲載されたのが、私たち水明人にとって、たいへん縁のある句なのです。

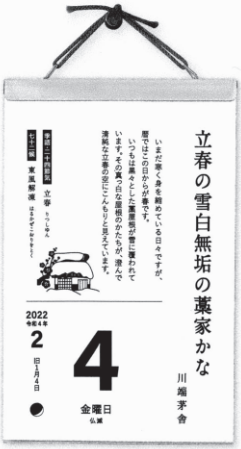
カレンダーに同封されている「俳句と俳人一覧」の中から、自分の句を探し出した時、そして、掲載された俳句と掲載日の意味が判った時、大変感激しました。

宇多喜代子氏が選出された三六五句と、その一句一句に付けられた解説が大いに役立つと思います。よろしければ、直接新日本カレンダー㈱電話０６（６９７１）４４８０へご注文ください。

主宰　山本鬼之介

俳句の日めくりカレンダー

2022 令和4年



一日一句、365句を掲載。 昨年より文字が大きく、見やすくなりました。

宇多喜代子氏の解説付き。 すべての引用句に、宇多喜代子氏の解説付き。

作句に役立つ「暦」の情報。 季語、旧暦、節句や行事などの情報も掲載。

送料無料！一冊からでも。 まとめ買い割引もありますのでご検討下さい。

資料をご希望の方は、下記へご請求ください。

俳句の日めくりカレンダー 2022
サイズ：18.5×12cm・380ページ
「掲載句と俳人の一覧表」付き
監修：宇多喜代子

2,000円（税込2,200円）

※在庫数に限りがあるため、品切れになる場合がございます。

新日本カレンダー株式会社　〒537-0025 大阪市東成区中道3丁目8番11号　TEL.06-6971-4480　FAX.06-6972-5885

俳誌望見

梅澤佐江

『河』　令和三年九月号　通巻七五四号
主宰　角川春樹　発行所　東京都新宿区

昭和三三年一二月、角川源義が東京で創刊。日本文化の根源にある「いのち」と「たましい」を詠う現代抒情詩を志す。（月刊）

主宰詠「柿若葉」二五句より

祝婚のレースの妻よ灯の涼し

純白のレースのウェディングドレスにロングベールの美しい花嫁を、座五の「灯の涼し」で更に美しさを際立たせる讃美とされた。

妻と歩く青水無月の月の道

ご夫妻の穏やかな佇まいも相俟って伝統的な青水無月の美しい季語により、心地良い夜風と月の光を浴びながら愛を更に昇華させて行くお二人の何とロマンチックな事。

柿若葉吾子に告げ置く死後のこと

柿若葉の艶やかに光る萌黄色は瑞瑞しく伸び伸びした命そのもののようであり、八歳になられた息子さんに投影する。「子に告げ置く死後のこと」とは、父として愛し子の将来を見据えて慈しみの思いで示唆されるのであろうか。武勇伝に富んだ作者であったが好好爺と変わられたようである。

青水無月さらに遠くのものを恋ふ

詞書に「照子死して十八年」とあり、源義氏亡き後、二代目の進藤一考氏から三代目主宰として二五年間「河」を継続された母照子氏を心から尊敬されていた事が伝わって来る。季語の「青水無月」は二句目とは違い慟哭さえ感じさせる、叙情の滲み出たお句で心に沁みる。

祈りの灯涼しき夏の灯となりぬ

詞書は「十八年前照子火葬後の所感」とあり、虚ろになった心も、感謝とご冥福を祈る心と共に「河」を継承して行く覚悟が定まった時、清清しい心境になられたのである。

幹部作品　自薦　六名　各一〇句より感銘句

白檜曾の匂ふ山雨や父の日来　鎌田　俊
ある時は真砂女きてゐる螢の夜　佐川広治
銅版画抜け出て少女裸足なり　淵脇　護

準幹部作品　自薦　五名　各七句より感銘句

日雇ひの男と暮れて巴里祭　井上純子
青水無月の保育器にゐる記憶あり　菊地悠太
七日目の蟬のいのちの鳴くところ　中村光声

銀河集　同人作品　主宰選　三七名　各六句より

山の上ホテルの雨の日暮や健吉忌　大友稚鶴
涼しさやビシソワーズの銀の匙　大友麻楠
六月のデモは遠き日モカを挽く　藤原はる美

半獣身　同人作品　副主宰選　一九二名　各五句より

パジャマにも杖にも名前茄子の花　斉藤隆顕
はつなつや綿菓子色の少女たち　藤田美和子
叔父さんは軽佻浮薄巴里祭　永島いさむ

河作品　会員　副主宰選　一二二名　各五句より

沙羅の花本家分家も女児ばかり　古小路憲子
明易しスイッチ入る炊飯器　牧田孝子

「魂の一行詩」を堪能させて頂きました。

句集喝采

近藤徹平

◆大竹多可志「空空」

東京四季出版

著者略歴　昭和二十三年茨城県日立市生。同三十七年「かびれ」入会、大竹孤悠・小松埼爽青に師事。平成十四年「かびれ」主宰継承。句集「気流」等六句集既刊。現在俳人協会茨城支部支部長。

著者はあとがきに、「かびれ」創刊九十周年記念の本句集の標題を自らの信条「心にこだわりのないさま」を表す「空空（くうくう）」と記し、「如月や空のまた空ひとり旅　多可志」と詠む。

野ざらしを願ふことあり西行忌
春日差す流砂の如き人の列
稲妻や闇に浮きたる巨大都市
秘策とは何もせぬこと花柘榴
放浪に憧れもあり神無月
年の夜や紙の差も無き運不運

第一句、著者の「空」の信条によれば宮仕えを辞し漂泊の歌人となった西行が憧れか。第二句、意志を持つ人間も列になると自然の流沙現象と同然か。第三句、巨大都市も自然の稲妻の前には沈黙。第四句、人間は秘策を用いず何もせぬことが上策。第五句、やはり西行への憧れか。第六句、企んでも「空」でも一年を終わってみれば紙の厚みの差もないのだ。

夫婦して酒を注ぎ合ふ春の風邪
愚痴までも夫婦よく似て冷奴

俳句の世界に没頭できたのも、内助の功のお陰と感謝。

◆松本美佐子「三楽章」

俳句アトラス

著者略歴　昭和十九年山口県生。平成八年「柚」入会、大井雅人に師事。「柚」終刊後、同十八年「春月」入会、戸恒東人に師事。「春月」退会、同二十七年「鳰の子」入会、柴田多鶴子に師事。

うららかや鶏が首出すバス通り
吊り雛をかはして入る雛の家
跳びすぎて蝿虎は蝿逃す
陰干しの子役の袴水狂言
サーファーのひとりは未だ草の上
みそはぎの穂でくすぐりし牛の鼻

何気ない日常の中にある非日常を見付けて句に纏める鮮やかな句作が光る。第一句、バス通りに面した鶏舎の景か。第二句、吊し雛を掻き分けて入る雛の店。第三句、蝿に逃げられたどじな蝿虎（はえとりぐも）の景。第四句、水狂言の子役が出番を終えた跡の始末。第五句、一人だけまだ海に入っていないサーファーの景。第六句、草原の草が牛の鼻をくすぐっている景。

問へば母今しあはせと新茶飲む
二日はや油彩のにほふ夫の背

著者はあとがきに、句集の標題を母君の句集と姉君の句集に続く音楽好きの家系の第三句集として「三楽章」と名付けたと記す。また表紙の絵は夫君の油絵とのことだがフランス印象派を彷彿とさせる傑作。「第四楽章」を期待したい。

第5回 水明塾を終えて

日高道を

第五回水明塾が十月二十九日（金）に浦和コミュニティーセンターで開催されました。

本年度は、初めての試みとして、午前と午後の二部制をとり、午前の部は水明集作家を対象とした、網野月を講師による「全句講評講座」、午後の部は水明全会員を対象とした、神野紗希特別講師をお招きしての講演会が行われました。

まず午前の部では、山本鬼之介主宰の挨拶から始まりました。

主宰は、水明の一部の作家に投句の乱れがあることを指摘され、投句の際の「心構え」（選者に対する気遣いの重要性）をお話しされました。

具体的には、主宰の選、あるいは編集部の編集作業に際してその作業を円滑に進ませるためには、用紙は切り取り線に合わせてきっちり切る、字は楷書で丁寧に書く、修正する場合には修正液で消すなどしてきたなく修正しない、などです。

簡単なことですので、是非気を付けたいと思います。

その後、網野月を講師による「全句講評講座」が開始されました。

二十五名の受講者には、事前に二句ずつ投句した清記が無記名で配られ、講師により一句ずつ丁寧な鑑賞と講評が行われました。

紙面の都合でその様子を全てご報告はできませんが、特に特徴的であったテーマについて若干ご報告します。

・「も」にご用心。（「も」は句の内容をぼかすことが多い）

・「し」にご用心。（「現在」を詠む俳句の中に「過去」の「し」が入ると句があまくなる）

・「て」にご用心。（原因・結果を表す「て」が句の中に入ると説明的になりやすい）

・季語の本意をよく理解することが大切。

全句講評が終わった後には、作者の名前の入った清記が配られ、その後の質疑応答も活発に行われ、参加者にとって大変有意義で貴重な時間であったと思います。

午後は大きな会場に場所を移して、今俳句界で最も「旬」な作家である神野紗希さんによる「俳句における鑑賞について」と題した講演を行っていただきました。

講演の初めに、講師が俳句を始めたきっかけである、松山で行われた「俳句甲子園」の今年度の大会の様子が納められた動画を見せていただき、その中での二つの高校の対戦の一場面から、俳句鑑賞の着目点、「読み」の大切さの説明に入ってゆかれました。

尚、講演の内容をご本人が水明の為に改めて書き下ろされたものが、水明一月号に掲載予定ですので、ここでの報告はここまでに致します。

最後には講師サイン入りの新刊句集などをお持ちいただき即売会を行いましたが一瞬で完売となりました。

大変わかりやすい説明、丁寧なご回答、そして明るいお人柄、水明会員の「紗希ファン」が増えたことは間違いありません。

水明塾・全句講評講座

網野月を

今回の水明塾では、去年までのそれと趣向を改変して午前中に全句講評講座を開催しました。二十五人の受講生を得て五十句を応募いただきました。当日の講評の内容を掻い摘んでみましょう。

広重の彫師の技や秋深し
持たざるも共に愉しき新酒かな

前句は、座五の季語「秋深し」の斡旋が効いています。ただ上五の「広重」の固有名詞がどれだけ効いているかが、問題となるでしょう。また中七の切れ字「……や」は難しい技法ですが、座五の季語「秋深し」が重い季語なので、受け止めていると思います。次句は、上五の接続助詞「も」が働いています。助詞の「も」は九割が詩興を損なう悪い「も」なのですが、この「も」は良いと思います。座五の切れ字「……かな」を廃して「持たざるも共に愉しき新走り」という方法もあります。

今日発つか雨といふのに秋燕
コロナ世や盾の様なる秋日傘

前句は、上五も中七も座五の「秋燕」に話しかけている構成です。旅立ちを案じているのは秋燕自身になりますが、「秋燕日延べを案ず今朝の雨」とする方法もあります。次句は、「コロナ世」の措辞がどれだけ馴染んでいるかが不安視されるところです。また、「……様なる」は本来視覚的把握ですが、次句は内容的把握として用いられていて、曖昧さを残しています。「コロナ世や盾とも頼む秋日傘」くらいでしょうか。

新蕎麦の香り味はふ一箸め
新蕎麦や山の水引く峠茶屋

前句は、「一箸め」に「新蕎麦の」香りを楽しんでいるという句意です。「一箸目」の表記が良いでしょう。また切れがないので、上五を「や」切れにして「新蕎麦や香り味はふ一箸目」としましょう。次句は、このママで良いと思います。取合せ技法の句で、同方向性の配合ですが、取り合わせの内容の離し加減が巧みです。

朝まだき夢の続きか糸とんぼ
道端の墓石に集く蜻蛉(あきつ・とんぼ)かな

前句は、未明のまどろみの中に「糸とんぼ」を垣間見た、という句意でしょうか。「朝まだき」と「夢の続きか」に重複感があります。逆の句意になりますが、「朝まだき夢断ち切られ糸とんぼ」とする方法もあります。「糸とんぼ」が確と実景になります。次句は、誰かの墓に詣でて化身となった蜻蛉に巡り会ったと解釈しました。「蜻蛉」の儚さという季語の本意にそっています。「墓石(ぼせき)」の表現が客観的に過ぎます。「道端の墓に群がる蜻蛉かな」はどうでしょう。

鵙日和庭いつぱいにシーツ干す
秋夕焼背に老犬と坂下る

前句は、鵙の高音が聞こえるようですね。「日和」と「干す」に重複感があります。俳句は十七音で表現しますから、極力重複する個所はどちらかに収斂したいです。「鵙高音庭いつぱいにシーツ干す」でしょうか。次句は、破調の句で、句跨りになっています。句跨りに気が付かない披講者にかかると飼い主が老犬を背負っていることになってしまいます。「老犬と坂下る背秋夕焼」とするのはどうでしょうか。

倒れてもなほ咲かんとす朝菊や
錆つきし秋風鈴やカラカラと

前句は、推敲の跡が見えます。少々力業になったでしょうか。無理に倒置したりすることはありません。また座五の切れ字「や」は至極難しい技法ですから、チャレンジする時は覚悟が必要です、ヨ。「朝菊や倒れてもなほ咲かんとす」とそのままで良いと思います。次句の上五の「……し」は過去の助動詞「き」の連帯形です。なるべく過去の要素を現在のこととして詠みたいですね。また座五の「……と」は「カラカラ」を風鈴の音だけに限定してしまっています。勿体ないですね。例えばですが、「カラカラ秋の風鈴錆にけり」とかです。

鶏頭花槍の如くに門に立つ
炭酸水浮かぶレモンに泡が寄り

前句は、直喩表現の「……の如くに」が副詞的に働き「門に立つ」を修飾しています。少々複雑な構成ですから、「鶏頭花槍ともなりて門に立つ」として簡素な表現の方が伝わることが多いかもしれませんね。次句は、「炭酸水」「レモン」が季重なりです。上五の季語「炭酸水」の後をより強い切れにしたいので、「炭酸水浮かぶレモンに泡が寄る」と座五を終止形にしてみました。大きく展開して、「泡の寄る輪切りのレモン玻璃曇る」とする方法もあるでしょう。

ロードショーはねし日比谷よ霧の海
秋晴やベルトに確と万歩計

前句は、都会の真ん中の「霧の海」ですね。上五中七が座五の季語「霧の海」の空間を限定しています。また、中七の「……し……」は過去の助動詞「き」の連体形です。「霧の海ロードショー跳ぬる数寄屋橋」くらいでも良いかと思います。「霧の海」を前提条件としてみました。次句は、このママで良いと思います。「秋晴やベルトに万歩計確と」「秋晴や触りて確と万歩計」として、もう一押ししてみました。

秋の夕門灯淡き指圧院
秋川のそろと入りゆく越の海

前句の上五の季語「秋の夕」は「秋ゆうべ」でしょうか。「指圧院の門灯淡し秋ゆうべ」「指圧院の淡き門灯秋夕べ」とも出来るかと思います。次句は、このママでしょう。秀句です。

銀杏散る廃校の窓金色に
微かなる揺らぎに遊ぶ芋の露

前句は、「銀杏散る」景を金色と把握しました。座五の「金色に」しながら「散る」と読めるでしょう。作者の視座はど

こにあるのでしょうか。原句では校舎の内からの視座として読むことができます。「銀杏散る廃校の屋根金色に」でしょうか。次句はこのママで良いでしょう。「凝らし見る揺らぎに遊ぶ芋の露」などとも出来ますね。

望月や鳥獣戯画を飛び出せり
逞しく伸（の）ぶる穐や見沼の田

前句の上五の「……や」切れは文字通り強い切れなので、「望月や鳥獣戯画を飛び出せる」とする方法があるでしょう。また上五の「……や」を解消して、「望の月鳥獣戯画を飛び出せり」としても良いかと思います。「戯画」から「鳥獣」が飛び出したと解釈しました。次句は、「見沼」という比較的狭い空間には限定しない方が良いでしょう。例えば、「逞しく伸ぶる穐や武州の野（や）」として大きな空間に移行した方がこの句は活きるように感じました。

G難度きりもみ着地落葉かな
雑踏の地下街抜けて鰯雲

前句は、三段切れに読まれてしまうのではないでしょうか。また座五の切れ字「……かな」は優しい雰囲気なので、「G難度のきりもみ着地柿落葉」として着地の確固たる感じを演出してみてはどうでしょう。次句の「雑踏」は「抜け」でしょうし、「地下街」ならば「通る」でしょうか。「地下街の雑踏を抜け鰯雲」としたいところです。

柿熟れし風甘くなるみちのく路
旅の秋寂（さび・じゃく）を深くす仏みち

前句の上五の「……し」は過去の助動詞「き」の連体形です。「熟れ柿や風甘くなるみちのく路」「熟るる柿風甘くなるみちのく路」くらいの方が、良いと思います。次句は、三段に切れて読まれるでしょう。「旅の秋寂深くする仏みち」として中七と座五を繋げてみました。

源泉のふつふつと湧く星月夜
廃坑のあとは野となり秋夕焼

前句は、所謂一句仕立てになっています。切れを作るのでしたら、「源泉のふつふつと湧き星月夜」となるでしょう。また中七の「……と」の用法ですが、「ふつふつ」のオノマトペが「湧く」だけに限定されていますから、「ふつふつふつ源泉の湧く星月夜」として擬音・擬態語が広く解釈できるようにする方法もありますね。次句は、「廃坑」「あと」に重複感があります。「廃坑は花野となりぬ夕日影」くらいでしょう。

雨毎に色増し来るや実紫
大風の去りて清しき鰯雲

前句の「色増し来る」という表現は「増す」だけでも成り立つと思います。「雨毎に色重ねつつ実紫」という方法もあります。次句は、何処かに切れを作ってみたいです。例えば、「大風の去り清々し鰯雲」ではどうでしょう。

押し花のように秋の蚊経本に
朝寒の手の強張りてグーチョキパー

前句の中七の「……ように」は、そのあとに動詞が来るの

が常套でしょうから、「秋の蚊」が挟まれている、という句意でしょうか。省略されている「挟まれている」の部分へ「……ように」の副詞的な表現を繋げるのは相当難しい判断になります。ここは賛否が分かれるところでしょう。「押し花のごとき秋の蚊経本に」とする方法もあります。次句は、上五の「朝寒」だから手が強張っているということで、少々理屈が垣間見えます。「朝寒の利き手振り上ぐグーチョキパー」として、逆の志向も可能ではないでしょうか。

目が合ひし痩せの野良猫秋の雨
きろきろと鳥のほおばる木守柿

前句の上五の「……し」は過去の助動詞「き」の連体形ですから現在形の句にして「目を合わす痩せ野良猫や秋の雨」としたらどうでしょう。次句の上五の「……と」とすると、ほおばる動作に限定したオノマトペになっています。鳴き声や挙動も「きろきろ」に含めてみたいです。とすると「きろきろ鳥のほほばる木守柿」でしょうか。

身にしむや亡友の家解体音
房総の太刀魚釣りてムニエルに

前句は、上五の季語「身にしむ」の本意は身に沁みるように感じているという意味です。本来の本意からはずれますね。本意を展げたと考えることも出来ます。ところで、「家（いえ）」ではなくて「家（や）」です。「家（いえ）」は家庭を意味し、建造物は「家（や）」となります。「身にしむや亡友の家の解体音」でしょう。次句は、日記的散文になっています。その分、大人目線では拾えないものを拾っていて、どうにか句の形にしたいものです。「太刀魚のムニエル食めば安房の海」くらいではどうでしょう。

立ち話の引き際上手秋深し
秋麗を手押し車の母と行く

前句ですが、「引き際」は水の際（時間的、空間的）と、職を辞する意味とありますが、立ち話を終わりにする意味を被せるのは少々難しいでしょう。「立ち話の仕舞ひ上手や秋深し」としたいです。次句は、「秋麗」の景の中をという意味でしょうね、「行く」が精神的な側面も叙しているように感じました。「秋うらら手押し車の母と行く」とすれば切れも生じます。

潮風のたよりが届く落花生
産土の杜にギイギイ鵙高音

前句は、このママでも良いと思います。ここ迄出来たのでしたら、もう一押し推敲する可能性も有しています。「潮風のたより届くや落花生」もしくは「潮風を届ける便り落花生」という方法もあります。次句は、「産土の杜に」……「鵙高音」が聞こえたという句意です。「ギイギイ」はありますが、季語の存在している空間の提示に終わっています。また「ギイギイ」がありますから、「高音」は重複感があります。「産土の杜にギイギイ鵙日和」で充分だろうと思います。

朝日ふる照葉の峡や音止まず
朝の日や垣根となりぬ串の柿

前句の上五の「朝日」は重複感があります。そもそも「照葉」

は秋の日を受けて輝いているのですから、「日」は要りません。「朝」だけ残せば良いでしょう。そうすると「朝遅き照葉の峡や音止まず」となります。次句では、「垣根」は下から支えられていますが、串柿は上から吊るされているということです。ベクトルが反対方向なのです。「朝の日や帷（とばり）となりぬ串の柿」としてみました。

華やかに醸す一滴檸檬かな
秋高や果敢に攻むる女子ゴルフ

前句の座五の切れ字「……かな」が勿体無いです。「華やかに醸す一滴レモン切る」「華やかに醸す一滴レモンの香」とするところでしょう。ただ、「華やかに」（副詞）＋「醸す」動詞でもよいのですが、「華やかさ」（名詞）＋「醸す」でも良いと思います。「華やかさ醸す一滴レモン切る」となりますね。次句は、「攻むる」の文語が「女子ゴルフ」の内容と合わないかも知れません。感覚的な問題ではあります。文語か口語かの選択は作者に委ねられています。

山恋し庭に木通の深き色
愛犬の一途に歩く秋高し

前句は、このママで良いと思います。中七の「庭に」は句末に「がある」を省略しています。が、「庭の」にすると「木通の深き色」に続いて「を見ていると」が省略されていることになりますから、「の」とする可能性がありますね。また「深き色」についても「山恋し庭の木通の熟るる色」としてみたり、「山恋し庭の木通の熟るる彩（だみ）」とすることも出来ます。次句は、私の趣味ですが？「愛犬の一途な歩み秋高し」はどうでしょうか。「歩く（動詞）」を「歩み（名詞）」という表現にして、同時に「一途に（副詞）」を「一途な（形容動詞）」という表現に変えてみました。推敲するということです。

荒波と共に暮してお茶の花
良夜かな時計の針は午前二時

前句の中七の接続助詞「……て」が座五の「お茶の花」を導き出している構成です。接続助詞の「て」は、前後を無理なく繋げてしまいますから、座五の季語「お茶の花」と上五中七の句意を結びつけることが出来ます。句意と「お茶の花」の因果関係は作者だけが知り得る事柄もしくは、作者だけが見た景ということになります。「荒波と共に暮しぬお茶の花」とするところでしょう。それでも季語が動く感覚が残ります。次句は、このママで良いと思います。月の季語は主に月の出を意識しています。「午前二時」に月を愛でるのは現代的な感覚であろうと思います。「良夜かな時計の針の止まりたる」として多少心象的ですが逆の句意にすることも出来ます。

秋澄むや始発電車を待つホーム
スタンドへ駆け上がる子よ秋日和

前句は、このママで良いでしょうが、「秋澄む」は日のある時間帯であり室外ですから、晩秋ではまだ夜明けしていませんね。また「電車」がありますから「ホーム」だけでも、プラットホームを意味しています。次句の座五の季語「秋日和」は少々曖昧でしょう。「スタンドへ駆け上がる子よ秋の雲」として駆け上がった先に雲がある方がいいのではないでしょうか。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
境　延昭報

夜上りの千年杉に爽気満つ　マスミ
ピアフの歌ふつと口を衝く秋夕べ　〃
爽やかや柾目の下駄に置く蹠（あうら）　〃
祝言の謡三番さやけしや　延昭
目も口もしばしつぼめて青蜜柑　稀香
朗朗と祝（ほぎ）の口上天高し　順子
口笛を吹けど踊らぬ案山子かな　はるみ
須走口に息をひそむる毒茸　節代

――以上特選

「七つの子」口遊む帰路秋夕焼　稀香
雨戸開け今朝の爽やか全部入れ　はるみ
受け口の女いきいき柿啜る　節代
さやけしや暁光音なくひろごりて　由紀子
草の実をまとひ三毛猫木戸口に　延昭
爽やかや坂の途中の礼拝堂　喜恵
爽やかやゴンドラ渡る大樹海　徹平
重ねられ絵馬爽涼の音をたつ　和葉
美しき嘘も爽やか生きる為　光弥
一人暮しの一人の時間爽やかや　順子
爽涼の鴉見紛ふ八咫烏　理恵
振袖の娘爽やかにポーズして　治子
爽やかや心身共に前のめり　チアキ
鳥声に目覚めし朝の爽やかに　和子

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田絹映報

学童や釣瓶落しの帰り道　敏江
馬草負ふなかに尾花のひかりをり　玲子
乗らずおく体重計や豊の秋　竺仙
このままに霧に包まれ眠りたし　いちい
仕事する夜霧の航空障害灯　峰雄

――以上特選

霧深し難破船めく窓による　竺仙
さらさらと霧の溶けゆく尾瀬の朝　峰雄
帰りにも全貌見せぬ霧の宿　敏江
草叢の草の匂へる秋の昼　玲子
夕霧にスカイツリーの消えた窓　いちい
山霧に追ひ詰められし展望台　鶴城
山霧に鎮もるホテルの赤い屋根　みどり
山霧や緊張真中の運転手　絹映

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄報

内弟子へ眼よこしまとろろ汁　萬蝶
ポケットのむかごころがる路線バス　喜久
零れむかごを民話の狐来て拾ふ　〃
人生の苦しみ愛しや零余子飯　理恵
蜉蝣や野川の流れ女体めく　康世
行者講大釜に噴くむかご飯　昇
蔦の葉もほろ酔ひ初めしワイン蔵　〃

――以上特選

小言がはりに塩二つまみ零余子飯　理恵
むかご飯陰膳に添ふ夫婦箸　萬蝶
炊き上げて山の日の香の零余子飯　大場順子
野仏の欠けし片耳秋の声　雅夫
瀬の音に洗はるる身よ秋日和　徹雄
此の里に寄り添ひ生きて零余子飯　康世
むかご飯母の匂に炊き上がる　岡野順子
編み直す古き毛糸や零余子飯　喜久
産土も今は客座のむかご飯　昇

第四例会（浦和）

境延昭
石井喜恵報

分校へ通ふ吊り橋蔦かづら　翔太
天高し紙飛行機が旋回す　〃
すつぽりと蔦が土蔵をからめとる　延昭
秋高し波止に居並ぶ干物売り　寛治
蔦かづら分けて確かむ道しるべ　順子
夕映えやジャズの音零す蔦の窓　昇
山峡の底深くして秋高し　由紀子
天高し一歩に揺らぐかづら橋　喜恵
——以上特選
秋高しオッヘンバックのマーチかな　暦文
蔦紅葉洞に息づく光蘚　マスミ
金星の笑顔控へ目天高し　光子
秋高し反則切符切られけり　修
秋高しどつかと据る津軽富士　昇
グロリアの歌聞く窓辺蔦のぞく　光弥
蔦紅葉蔵に静かに寝るワイン　恵子
城跡に野面の石垣蔦紅葉　玲子
遊愁なほ蔦紅葉散る石畳　由紀子
秋高し二人づつ乗る観覧車　延昭
百年の煉瓦の学舎蔦紅葉　翔太
シスターと会釈を交はす蔦の門　でん治
朝練や二段弁当秋高し　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

手酌酒少しぬるめや秋さびし　はるみ
書き置きの一行にある秋思かな　義子
見沼田の空は茜に野菊摘む　玲子
ともがきの欠けて秋思の老の膝　水尾
秋さびし牽かれ行く貨車闇の箱　理恵
其の中の一輪を摘む野菊道　佐江
マーラーの楽章佳境なる秋思　〃
——以上特選
一管の笛の流るる秋思かな　水尾
野菊を髪に長屋小町は小走りに　理恵
山小屋は今日で閉めます野紺菊　美佐尾
晩鐘のわたる嵯峨野路秋思かな　玲子
傍らで野菊ゆるるや逆上がり　はるみ
野菊晴半眼やさし道祖神　義子
土方歳三の遺品「兼定」にある秋思　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子報

仕組まれし二度目の出逢ひ菊の宴　ひろこ
小企業なれど八年秋麗　はるみ
存へて腕に玄孫菊の宴　千春
重陽や食用菊の並ぶ店　俊晴
菊酒や永久に微笑む菊慈童　マスミ
重陽や課長代理のピンヒール　慶子
デコルテの鎖骨麗し今日の菊　萬蝶
——以上特選
孫や子の企て見事敬老日　慶子
企踊せし吟行いまだ秋の雨　マスミ
重陽や太極拳の朝稽古　俊晴
重九と掛ければ八十路の己かな　儀勝
重陽や謂れの知れぬ物を干す　ひろこ
菊の日や百歳雛の悟り顔　理恵
心足らひや湯船に香る今日の菊　佐江
重陽や苦手の九九の九の段　千春
矢のように過ぐる一日こぼれ萩　鶴城
重陽や叔父が自慢の酒持ちて　はるみ
扁額の巧拙如何に三九日　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

初紅葉御座船の窓閉ぢしまま　早苗
柿衞の芭蕉の軸や秋の声　玲子
新藁の香に古里が近く見へ　千津子

敗荷や三角四角棒グラフ　ゆら女
夕暮れておどろおどろや破蓮　洋子
風紋は神のたはむれ雁の列　和子

――以上特選

刺虫を始末の後のメランコリー　早苗
敗荷や闇に聳ゆる大手門　玲子
敗荷や戦国跡を彷彿と　礼子
敗荷の風に抗ひ浮き沈み　千津子
破蓮戦場跡が甦る　敦子
水に泛く日輪ゆらし鴨来る　ゆら女
穴掘りし苦労の甲斐のとろろ汁　洋子
浜に出て泣き砂泣かす星月夜　和子
褪色の千本格子秋の風　道子
舗装路に泥落しゆく稲刈機　千枝子
朝散歩徐々に明けゆく風の色　千世子
敗荷や突如くづるる水管橋　満耶子
芭蕉葉で包むなれ鮓母の味　きわゑ

昔話あれこれ10

応神天皇の事績

応神天皇はその治世にいくつかの事績を残している。海部（漁猟や航海に従事）、山部（山林の管理や収穫に従事）、伊勢部（伊勢の海を管理）などを定めた。

また灌漑用のための池も造った。

鍛冶・機織・造酒・造池などの技術を導入し、百済などから、多くの技術者・学者が渡来し、論語・千字文（千字文の成立は六世紀、天皇を称えるために応神朝に遡及しての記述か?）などの書籍が伝来した。

大山守命の反逆

応神天皇の崩御の後、大雀命（おおさざきのみこと）は父の命令に従い、天下を異母弟の宇遅能和紀郎子（うちのわきいらつこ）に譲った。しかし大山守命は天下を得たいと思い、密かに戦いの準備をした。大雀命はそれを知り、宇遅能和紀郎子に伝えた。

弟王は、宇治川の川辺の見晴らしの良い場所に陣幕を張り、立派な椅子を置き、そこに影武者の舎人を座らせ、官吏達にその前を恭しく行き来させ、いかにも弟王がそこに居るように見せかけた。

弟王は、兄王が川を渡って攻めて来るのを想定し、賤民に変装して船頭のように見せかけて、船の舵を取って待っていた。また、船の底には真葛の根から作った粘液を塗り、踏んだら倒れるように仕掛けておいた。

兄王は宇治川を渡ろうとして、兵達は隠しておき、猪狩りを装い衣服の下に鎧を着けて、その船頭に「対岸の山に凶暴な猪がいると聞いている。その猪を仕留められるだろうか」と尋ねた。船頭は「今まで何度も討取ろうとしましたが駄目でした。」と答えた。

しかし兄王は船に乗り込んだ。川の中程に来た時、弟王は船を傾け、兄王を川に落とした。宇治川の流れは速く、兄王はそのまま流されて行った。川の辺に隠れていた弟王の兵士達は一斉に立ち上がり、弓に矢を番え、矢を射る構えを見せ、兄王を追い流した。やがて兄王は川に沈んだ。その遺骸を引き上げ、奈良山に埋葬した。

皇位を譲り合う兄と弟

その後、大雀命と宇遅能和紀郎子はお互いに皇位を譲り合っていた。

ある時、海人が貢ぎ物を持って来た時、兄王は弟王の所に持って行けと言い、弟王の所に持って行くと兄王の所に持って行けと言い、その間に何日も過ぎてしまった。こんな譲り合いは一度や二度ではなかった。

しかし、弟宇遅能和紀郎子が早世したので、兄大雀命（仁徳天皇）が皇位に就いた。

（つづく　丸山マスミ）

各地句会

水明鬼石句会（鬼石）

越後より畑終ひといふ今年米　和子
胡桃落つピンと立ちたる犬の耳　聡子
十代の思ひ出胸に十三夜　ナヲ子
ナフタリンたつぷり母の秋袷　紀子

はこべ句会（浦和）

秋耕人の影は名画の一シーン　和子
文楽の太棹重き文化の日　久子
霜降や盆栽の木々色増しぬ　敦子
学寮の賑はひ遥か蔦紅葉　光子

櫟の会（浦和）

大紅葉華厳の滝が迫り来る　朋子
鳥渡る国後島望む森繁像　裕誌
鮭骸紅葉連れて浮き流る　彰二
赤々と湖水火の海夕紅葉　克之
鳥渡る浮世離れて一軒家　富子
車窓過ぐ色それぞれの谿紅葉　文子
渡り鳥群に遅れし一羽かな　富美子
薄紅葉ぼかしを効かす俄画家　千重子
鳥渡る先にうつすら佐渡島　妙子
大胆な子の地上絵や鳥渡る　治子

青葉の会（浦和）

日日が心底百姓大根干す　政代
昴さがすやや寒けれど確と見ゆ　美紗子
やや寒の雨戸繰る手のためらふや　真理
やや寒しシチューの夕餉早めたり　美智枝
編みかけの膝掛けまだよやや寒し　美子
刈田道沈む夕日に合掌す　啓子
やや寒や朝の万歩とおみそ汁　公子
心拍を乱す訃報や朝寒し　洋子
門出を祝ふ水引の蝶秋高し　和子
秋の浜足首残し波退けり　輝翠

珊瑚の会（浦和）

コロナ宣言解除す京へ紅葉狩　史代
露置きし径に獣の花押あと　和子
中央区銀座屋上庭園紅葉酒　広子
あれこれと露おく野菜朝の市　和葉
ここいらは平家の裔や紅葉狩　かつ子
夜を来て苫屋にほどく露の髪　喜恵
そそり立つ奇岩石門紅葉狩　マスミ
騒音を下界に置きて紅葉狩　水尾
紅葉見や霊峰映ゆる鏡池　昇
紅葉狩り山猫拝の文を持ち　恵子
混迷のこの世を洗ふ露しぐれ　光子
夜泣石の真偽たしかむ露の宿　節代

神戸大池句会（神戸）

ねえや恋ふ露風の里の赤とんぼ　玲子
ながつきや季のうつろひを篭り居て　礼子
長月や終日飽きず雲の綾　千津子
ゼロ歳の紋付き袴菊香る　早苗

花衣の会（浦和）

身に入むや病の母へ笑顔見せ　みよ
別れしも恋ひしき想ひ後の月　みち
この中に動く物ゐる下り簗　峯雄
渓流の光の中に下り簗　章嘉

芙蓉句会（浦和）

渡り鳥空の青さに深呼吸　正子
渡り鳥病む夫に折る千羽鶴　道子
人混みのなかの独りや鳥渡る　税子
鳴くもよし鳴かざるもよし渡り鳥　仁
大空をV字飛行の鳥渡る　ともこ
難民の羨ましかろ鳥渡る　美子

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

ミサイルの着地は知らず初秋刀魚　延昭
虫喰ひの幟へらへら村祭り　美枝子
己が身を己が油で焼く秋刀魚　正信
霧深し宇宙船めく山の宿　倶子
さらし巻く胸が気になる秋祭　俊晴
霧深し戻りの道に迷ひさう　淑子
濃霧にも歩く速さの視界あり　早都子
電磁波で解凍秋刀魚焼いてをり　千恵子
茸汁愚を貫きし貌と貌　昇

水明松本句会（松本）

秋澄むや日の傾きも歩の速さ　陽子
十五夜や腰から下げるきびだんご　マリス
芋掘りの泥ぐつはいた子の笑顔　玲子
こまやかな友の手紙や秋の蝶　寿子

りんどう俳句会（浦和）

母宛の住所を記す林檎園　紀子
待つ人のゐてこそ送るりんごかな　利子
紅玉や並木路子の声今も　翔太
摩周湖の吉祥を呼ぶ濃霧かな　サヨ子
霧湧きて山城囲む静寂かな　卓郎
林檎放る妻の直球受けそこね　徹雄
這ひ這ひのややとりんごの睨めつこ　弘夫
籾殻を隅々探り手に林檎　君夫
夕霧や宝物殿の小さき窓　寛治
林檎さすや真一文字にくちばし来　治子
林檎むく円周率に身をまかせ　正信
りんごかじり故郷想ふ泪かな　典子
真青なる空を手繰りて林檎挽ぐ　順子

たかんな俳句会（川口）

秋高し飛行機雲の延びゆけり　久美子
終電を逃し道連れ後の月　のり子
秋高し月満ちてこそ静かなり　福美
終バスの遠のくあかり駅夜寒　小麦
柱廊は濃い影残し天高し　勢津子
秋高し旅のページに思ひ馳せ　和子
唐突に谷を震はす鵙の声　義子
見え透いた嘘をつく奴秋高し　鶴城
秋高し棟木に響く一の槌　水尾
終演の覚め遣らぬ宵実葛　静香

蝌蚪の会（浦和）

城跡の得体の知れぬ茸かな　信一
実紫小雨に濡れて色深し　朝香
傾ぐ舟見上ぐる夕の雁の列　礼子
清晨の露置く小径チャペルまで　ひさの
白露や真珠のピアスつける夜　るみ子
海を越え星を測りて雁の列　さち子
草の露命の水のひとしづく　元美
不倫とは純愛もあり朝の露　月を
容体の変はらぬままに秋の暮　鶴城
オンラインに身内の安堵雁渡る　宣子

皐月の会（浦和）

橡餅や問はず語りの白き夜　珪子
美しくあれと名付くる神無月　順子
詣で人なく山門の落葉かな　紀子
肖像画の美少女笑むや月涼し　静香
みちのくや車窓に映る初紅葉　孝麿
秋高や木洩れ日の風美しく　久子
川下り終へて茶店の橡団子　暦文
雲上のアルプスを行く黄レモン　きいち

鶴川山百合句会（町田）

この村にこんなにも人秋出水　雄二郎
色神の目に竹春の淡き艶　月を
水旨し青き葉擦れや竹の春　喜久
越前竹人形館裏よ竹の春　史代
大仏の螺髪くるくる竹の春　広子
台風やボードゲームに時忘れ　由美子
台風をつれて四国の友来たる　千春
閉ざされしままの茶室や竹の春　理恵
竹の春双子のパンダ犬歯生ゆ　美千子
里山に地唄の聞こゆ竹の春　玲子

円卓の会（浦和）

秋灯やキネマの神様降りて来る　静香
手招きの遊女の影や柳散る　翔太
秋の夜や柱時計の音近し　修
不動明王足もとにある秋海棠　輝翠
天高し招魂の声二度三度　道を
遠見にも初冠雪や火打山　月を
千振や思ひもよらぬ招待状　鶴城

野ばらの会（浦和）

錆鮎やたくまし顔の生きざまよ　治江
峡の家の軒に陽を呼ぶ柿簾　茂子
干し柿の出来は上々婦人会　夏江
山里の軒を豊かに柿すだれ　和子
軒並に吊し柿あり飛騨の里　秀子
山里の風に粉を吹く吊し柿　栄子
干柿の化粧程良く美人なり　みき子

若鮎句会（浦和）

コスモスの風ふところに仕舞ひけり　亮一
コスモスの街道時速20㎞　夕峰
コスモスやAKBやらNiZuUやら　稀香
荒野明けなぎ倒されし黄コスモス　万美
コスモスや風を見送る形して　みえこ
月あかりコスモスの丘浮かせけり　芳春
昔日の夢のあとさき十三夜　香音子
命日に父を捜すか秋桜　さなえ
十三夜眼下に広がる街灯　順
秋桜の向かうにバスの開く音　拓真
言伝の返事まだ来ぬ十三夜　月を
追ひ来るは車夫の曳く影十三夜　鶴城
仄暗きくぐりに落つる後の月　喜夫

ミモザの会（横浜）

握りしむ落穂の重み途上国　萬蝶
青い空呑み込んでゐる秋夕焼　栄子
八分音符に菜を刻む音いわし雲　玲子
落穂ひろふごと三和土の米ひろふ　亜弥子
落穂拾ふ爺婆の身も昏れゆけり　史代
ほろよひのうさぎ論争今日の月　慶子
ざあと来て落穂ついばむ鳥の群　千春

和歌山水明句会（和歌山）

渡り鳥沖向いて立つ朱の鳥居　和子
敗走の武者の幻影破蓮　道子
ちつちやな壺で戻る愛犬青蜜柑　千枝子
案内状各位に分けて秋気澄む　千世子
「パタカラ」と口の訓練ななかまど　満耶子
秋深し夫の元気に驚嘆す　きわゑ
ちちははのお側へ夫や秋桜　洋子
ISS過ぎジンジャーの闇匂ふ　廸代

きざきサークル（浦和）

聴きちがへ多くなりたり朝寒し　光子
少年の場外ホーマー鰯雲　啓子
飛行機雲をのみ込んでゐる鰯雲　倶子
ベランダの過ぎ行く風の鰯雲　かつ子
鯖雲や浴室リフォーム憩ひの湯　和枝
朝寒に宇宙遊泳のごとまろぶ　喜代子
コロナ薬挫折や迷走鰯雲　タイ
熱熱の味噌汁旨し寒き朝　和子

芽吹句会（浦和）

モンブラン天辺にのる丹波栗　修
笑栗や艶の三つ子がまるまると　チアキ
漢字パズルの碁盤目うづめゆく夜長　ひろこ
長き夜や鳥羽僧正とひとつ灯に　玲子
コスモス野揺れて次々目を覚ます　千重子
茨城弁飛び交ふ山で栗拾ひ　富子
長き夜や寝返りを打つ妻の足　道を

光が丘俳句教室（東京）

彼の女の逝きしと便り赤のまま　守伊
秋祭名入り提灯揺らす風　はる
なまり濃き人の世話する秋まつり　康子
子規の顔横顔ばかりふと秋思　竜也
空見えぬほどに茂りて糸瓜棚　理恵

繭の会（浦和）

秋うらら鼻を拡げて猫伸びる　悦子
箒目の影くつきりと秋うらら　粉雪
丹波路を横切る猿や栗ご飯　信一
栗飯や割れし黄金の栗の粒　孝男
路沿ひに鰻ののぼり秋うらら　トエ
栗の飯頬ばる父を偲びをり　真由美
秋苑や枕と化する黒鞄　月を
栗飯やとんがつていた日の弁当　鶴城
鬼皮と格闘一日栗おこは　京子

水明熊谷句会（熊谷）

パン生地を厨にねかせ後の月　燈女
かなかなや竹林深く産まれ出づ　治江
ふと胸をよぎる余生よ十三夜　栄子
異体字のボトル打ち寄せ秋深し　徹平
蔀戸を締むる僧侶や秋深し　和子
樟脳の香ほのかに秋深し　秀子
秩父産金胡麻を刈る夕畑　茂子

俳句の手ほどき（岩槻）

染付は徳利に屋号かまどうま　延昭
銀色に街を染めゆく秋時雨　佐江
虎の子に利息十円身にぞ入む　ます美
秋時雨清漣満つる水面かな　水尾
街灯に暈のかかりて秋しぐれ　義子
分校の帰りのチャイム秋しぐれ　美佐尾
大利根川原迫り上ぐる赤い月　徹平
秋時雨源氏を偲ぶ切通し　翔太
秋高し支流数多の大利根川　忠男
秋時雨庇を借りるはぐれ猫　卓郎
利発の子今は凡人古酒を飲む　美子
湯の街に夢二をたどる秋時雨　幸代
身に入むや湯呑み利休の鼠志野　桂子
秋陽さすへやに赤子と利発猫　久美子
菊の宴利久色なる帯締めて　かつ子

山茶花（浦和）

棟上げの槌音高き秋日和　マスミ
秋日和り自治会よりの贈り物　清一
山寺のささくれ擬宝珠秋日和　泰子
どんぐりをびくびく拾ふけもの道　美江子
菩提寺で静かに写経秋日和　しず子
大空の雲と歩いて秋日和　光子
絵タイルの道にどんぐり弾けをり　綾子

柿の木塾（浦和）

後継ぎもなく秋耕の二人かな　かつ子
五臓六腑を主治医に預け温め酒　昇
乱れ髪ゆつたり束ね温め酒　節代
海風の昇る棚田を秋耕す　光弥
温め酒うなづいてゐる喉仏　水尾
その内の一人は下戸よ温め酒　和葉
親のやうな女将相手に温め酒　俊晴
秋耕す夕日に向かふ大き背　恵子
荒草もあつと云ふ間の秋起し　和子

あゆみの会（浦和）

補助輪をとりて日曜秋の雲　朋子
秋の雲防災ヘリが旋回す　圭子
秋の雲我が物顔で絵を画く　山遊
秋雲に紙飛行機の大旋回　重子
新蕎麦を黙々啜る親父殿　和
秋雲に茜刷きつつ夕日落つ　藻好

雛の会（浦和）

新豆腐崩さぬものに志　喜恵
新豆腐世渡り下手はいかんとも　政代
名水や布目の透ける新豆腐　燈女
吾子の歯の生え揃ふてや新豆腐　輝翠
かりがねや嫁ぎし吾子の声音とも　チアキ

桜林句会（大宮）

母と子の影もつれゆく良夜かな　知子
校庭の土俵たちまち虫の闇　光子
鳥渡る古木の空ぞ平林寺　光代
苦も楽も杖を頼りに虫の声　美佐尾

りそな俳句会（浦和）

交番の灯り息つく夜寒かな　暦文
独り居に余る十畳夜寒かな　雅夫
コスモスの丈に合はせしかくれんぼ　京子
書き出しで躓く手紙夜寒し　寛治
コスモスの野に一人立つ遊子かな　道を
コスモス野一時停止すローカル線　久美子
閉店のシャッター錆び付き夜寒かな　建治郎
湯揉唄ほつこりと聞く夜寒かな　マスミ

水明小川句会（小川）

裏木戸に楚々と一輪貴船菊　きよ子
病む人の心根を知る夜寒かな　みや
星月夜人工衛星まぎれたり　綾子
減量の根気失せるや秋闌ける　栄子

野菊の会（与野）

まあまあと言ふ体調や蚯蚓鳴く　美代子
秋光に爛るる一樹札所跡　和子
つつがなく今あることや星月夜　清子
灯台の見送つてゐる流れ星　光子

櫻蔭句会（浦和）

畦を行く飛ぶ翔ぶ蝗捕る老女　茂子
街並みの昼も灯点す秋の雨　由紀子
秋雨にぬれて夕顔の実葉を傘に　千恵
秋の雨友のメールに和みけり　多美子
秋雨の尾瀬の湿原沼煙る　美子
語らへば吸ひ込まるるや秋雨に　真理
愛護施設の犬の眼うつろ秋黴雨　公子
秋雨やぴたつと止まる救急車　美智枝
秋雨が浸み入る名画座の通り　幸代

水明大阪俳句会（守口）

遠くより我が家の軒や柿すだれ　ゆら女
薄き夜具をひとつ重ねて九月尽　洋子
金風に踊る髪ターバン締めて　智恵子
温め酒永代経を浴びし夜は　人美
風船の子の手を離れ鰯雲　和子

新樹の会（浦和）

遠くまで声の届きし秋の原　京子
竜田姫参道抜けて山染むる　清吉
人知れず秋の潮入る遠江　徹雄
異常気温躁になりしか竜田姫　修
関東の山はまだ見ぬ竜田姫　道を
遠峰の襞の錦や秋深し　鶴城

☆　☆

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。　主宰　山本鬼之介

[指導者]　網野月を
[作　品]　５句　［受講料］1,000円
[方　法]　①用紙自由　②住所･氏名･電話番号を明記　③84円切手を同封　④返信用封筒は不要　⑤締切なしで随時受付
[送付先]　網野月を　電話 080－7580－0208
〒338-0012　さいたま市中央区大戸１-31-２

水明通信

愉しき哉「俳句生活」

元田亮一

「香椎」と云う地名をご存じの方は、どの程度いるだろうか。福岡市の小さな町である。清張ファンはピンとくるかもしれない。出世作「点と線」の冒頭、官僚と女中が情死したのが香椎浜の海岸である。

この香椎のシンボルが香椎宮である。この地での仲哀天皇の崩御を悲しまれた神功皇后が建立した。全国一七箇所の勅祭社の一つである。古人も多くこの地を尋ね、万葉集、新古今和歌集には、香椎を詠った歌がいくつか残されている。

ちはやふるかしひの宮のあや杉は
神のみそきにたてる成りけり

（読人不知・新古今和歌集）

十五年ほど前、突如として両親の老後問題が起きた。過程は省略するが、妻と二人の娘を実家近くに戻すこととなり、住居を探すこととなった。運よく香椎宮まで徒歩十分の距離に住居を見つけた。単身生活では妻への感謝の念が生まれるやら、家庭の有難みを再認識する等、得たものも多かった。

会社生活も三十六年目となり、昨年、親会社から関連会社へ転籍した。定年後を考える時間も増えた。学生時代は読書三昧な日々を過ごし、出版社に就職したいと夢見た時期もあった。現実の就職先は金融機関である。今では時間の余裕ができ、文芸への情熱が再燃したのか、俳句に導かれている自分に気付いた。句作を始めて数か月後、「水明」の存在を知り、ご縁をいただき若鮎句会に参加させていただいた。句会では、網野月を先生、世話人の青木鶴城さんをはじめ素敵な方々との出会いにも恵まれた。

俳句を志すと、季節の移り変わり、風の強弱が鮮やかに感じられる。俳句の薬効であろうか。一方、締切が迫り満足な俳句が出来ないときには、我身の非才を大いに嘆いたりもする。香椎宮を散策すると思いの外、俳句にまつわる史跡が多いことに気付いた。漱石も新婚時代に新妻鏡子と訪れている。

秋立つや千早ぶる世の杉ありて　漱石

今、一つの夢を抱いている。定年となり故郷に戻るまで五、六年は残されている。その間、皆様方に指導を仰ぎ、実力を蓄えたい。そして、帰郷の折には香椎水明俳句会を立ち上げたいのである。もとより、浅学非才の身であり、大それた夢ではあるが、人生百年と考えれば時間の余裕はある。これからの精進次第で夢はいかようにも描けると信じたい。これからの皆様方のご指導、ご鞭撻を心よりお願いする次第です。

水明通信

幻住庵

秋谷風舎

『「これやこの」の蝉丸を卒論のテーマにした』という方が、転勤したばかりの大阪の職場にいた。蝉丸の「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」だ。聞いて思わず逢坂の関跡を見に行きたくなった。それまで、関東周辺の関跡はいくつも見てきたが、逢坂の関跡は見ていなかった。

関西の山の雑誌に『音羽山の輝く落紅葉』が紹介された。登山口は、京都府と滋賀県の府県境の、あの蝉丸の逢坂の関跡だ。初冬、芦屋の自宅を車で出発した。逢坂の関跡に程近い、京阪電車京津線大谷駅の近くに車を置いて歩き始めた。すぐに蝉丸神社分社があった。続いて、逢坂の関跡石碑が立っていた。石碑の周りは、何もなく、ただ細い、山賊でも出そうな山道だった。国道一号線を右手に見下ろして音羽山に入った。音羽山の山道は雑誌の紹介に違わなかった。朝日を浴びて、紅葉色の落葉が輝いていた。絨毯のようだった。ふかふかに降り積っていて、踏むのがもったいない程だった。

気持ちよく山道を南進すると視界が開けた。音羽山の山頂だった。山頂から京都市街地と琵琶湖南部が一望できた。初日を拝むには良い場所だ。眺望を左右に、早めの昼食にした。曇ってきた、やや風も出てきた。時雨が心配されたが、しばしの眺望を楽しんだ。逢坂の関跡に戻る考えもあったが、滋賀県側に下りてみたくなった。山頂から南進、国分山を経由して、たんたんと下山した。途中誰にも会わなかった。下りた所は、山に迫った奥まった住宅地だった。

国分山の斜面に沿って、大津市街地へ向かった。左手斜面に簡素な小さな門があった。門の奥に小ぶりの庵が見えた。なんとなく気になったので、門をくぐって庵に近づくと、幻住庵と記されていた。あの芭蕉の庵だった。庵のたたずまい、その景が脳裏に刻まれた。幻住庵から紫式部の石山寺も、瀬田の唐橋も指呼の間だったが、以前に訪れていたのでパスした。京阪電車石山寺駅から浜大津駅経由で大谷駅に戻った。浜大津駅で妻への土産用に餅を買った。時雨にも見舞われず、満ち足りた気分で帰宅した。

後日、幻住庵の記を取り寄せた。芭蕉句「先づたのむ椎の木もあり夏木立」、その時は冬木立だったが、追体験したような気持ちになった。

☆　☆

新春俳句大会のお知らせ

［日　　時］ 2022年1月25日㈫　12時受付　12時45分開会

［会　　場］ 浦和駅東口　浦和パルコ９階　第15集会室

［投　　句］ ２句　兼題「初東風」「仏の座」各１句　締切12時

［参 加 費］ 1,000円（飲み物は各自で持参して下さい。）

※会場はコロナ対策のため申し込みの無い方は参加出来ません。状況によっては、内容を変更する場合があります。

［申　　込］ 参加費を添えて、１月５日から17日まで総務部宛

担当：事業部

最近の名句集を探る　座談会

太田土男『草泊り』
能村研三『神鵜』
奥坂まや『うつろふ』

司会＝筑紫磐井
大西　朋
土肥あき子
西村麒麟

今月の華　特別編　冨士眞奈美・吉行和子　対談

◆巻頭三句
稲畑汀子
宇多喜代子
高橋睦郎
大串　章
中村和弘
能村研三

◆俳句四季大賞　受賞記念作品40句
池田澄子

◆俳句と短歌の10作競詠
星野高士
川野里子

◆今月のハイライト
「ホトトギス」創刊125周年

◆好評連載
藤枝リュウジ　575の散歩道
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西　朋　俳句へのまなざし
神作研一　手のひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
酒井佐忠　本の窓辺
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki

2022年1月号　12月20日発売　定価1000円（税込）

http://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

令和４年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応 募 句	未発表作品：15 句(表題を付す) 水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
締　　切	令和４年２月末日（発行所必着）
応募方法	**水明 12 月号に応募用紙添付**

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員（９名）

山本鬼之介　網野月を　大村節代
石山かつ子　石井喜恵　井口俊晴
保坂翔太　青木鶴城　日髙道を

新珠賞推選委員（５名）

宇田白鷺　大橋廸代　茂木和子
椎野美代子　波多野寿子

インターネット句会のご案内

９月よりインターネット句会を始めました。

ホームページの「インターネット句会」に皆様からの投句や選句結果が掲載されています。是非ご覧ください。

どなたでも投句できます。皆様の多数のご参加をお待ちいたします。

【参加資格】　問いません。会員以外の方も歓迎します。

【投句方法】　ホームページの「**インターネット句会**」を開いていただいて、「**投句フォームはこちら**」から投句できます。スマホは右上の MENU からインターネット句会に入ります。

【投 句 数】　**２句**

【兼　　題】　**当季雑詠**とします。

【締め切り】　**毎月 20 日**

【清　　記】　**毎月 22 日**にホームページに掲載します。
（インターネット句会の「**今月の投句清記**」に掲載）

【選　　句】　「**選句・選評フォームはこちら**」より送信してください。清記の句から**特選番号**と**普通選番号**を入力してください。（選評は一行程度に簡略化してください。）

《記入例》

特選：№.20　季語の斡旋が秀逸。○○○○の言葉の妙。

№.12　○○○○○○に季節感がよく表現されている。

№.30　破調が効いている。季語との距離感が良い。

【選句締切】　**毎月 25 日（厳守ください）**

【選句結果】　**毎月末まで**に選句結果と選評をホームページに掲載します。
（インターネット句会の「**今月の選句･選評**」に掲載）

※公序良俗に反する句は掲載出来ません。

事業部

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2022年1月号

特集 五感で詠む！ ～みる俳句・きく俳句
○「視覚」の名句　津川絵理子
○「聴覚」の名句　今瀬一博
○「触覚」の名句　田島健一
○「味覚」の名句　山西雅子
○「嗅覚」の名句　白濱一羊
○五感で句を詠もう
田中亜美　関　悦史　川越歌澄　前北かおる

作品21句　安原　葉　大久保白村

〈グラビア〉俳句界NOW　柏原眠雨

特集 私を救った俳句
佐藤麻績　衣川次郎　井上康明　長嶺千晶
佐藤成之　成田一子　藤原暢子

投稿欄選者新春競詠
発表 第12回北斗賞　選評 受賞の言葉 ほか
＊セレクション結社「うぐいす」鴻野真知子

私の一冊　甲斐遊糸「湧」

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！
アイリーン・美緒子・スミス

「俳句界」投稿欄　一流選者14名！ 日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森　お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

特集 新春詠 私はこう詠む
新春巻頭作品7句
宇多喜代子・宮坂静生・能村研三
奥名春江・石井いさお・山田貴世
藤本美和子・小澤　實・恩田侑布子
高柳克弘

俳壇 1月号
12月14日発売
定価900円（税込）

巻頭エッセイ
中原道夫

八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句［第Ⅲ期］…佐怒賀正美・武藤紀子

新連載
色の歳時記 ……井上弘美
俳句文法　そこが問題、そこがポイント ……井上泰至

連載
俳句史を見直す ……秋尾　敏
ものがたりのある俳句 ……毬矢まりえ
先人のことば ……対中いずみ
小説・遥かなるマルキーズ諸島 ……マブソン青眼
俳壇時評 ……仁平　勝／俳壇月評 ……岩田由美
俳句と随想12か月　河原地英武・長島衣伊子

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

風　声

○**現代俳句**十月号――「現代俳句年間２０２１を読む」欄
田口彌生氏の感銘十句抄に
長廊下蹠に優し夜の秋　星野和葉
○**現代俳句**十月号――「現代俳句の風」欄
足るを知る身にときめきよ良夜かな　河原叔子
石段の今朝の落葉はまだ若し　梅澤輝翠
磔刑のイエスに似たる案山子かな　染谷正信
笹舟を一気に流す秋の風　宮崎チアキ
鳥渡る空の信号知りつくし　由良ゆら女
○**現代俳句**十月号――「新入会員記念作品」欄
ひらがなの風のこゑきく薄暑かな　元田亮一
近よれば近よつてくる金魚かな　〃
影おとす沼さ緑に夏木立　曲淵徹雄
火蛾誘ふ昼の火照りの残る街　〃
缶ビール窓辺に置きて発車待つ　下川光子
一人欠けままごと終る鳳仙花　〃
脱獄の跡とも蟬の穴数多　本橋稀香
凍空の毛細血管めく梢　〃
○**草笛**（太田土男代表）十月号――「受贈誌一詠」欄
風青し門出に唄ふ「御立ち酒」　**鬼之介**
○**くぢら**（中尾公彦主宰）十月号――「受贈俳誌美術館」欄
弦月や舳先を沖へ廃れ舟　**鬼之介**
○**新月**（松田碧霞主宰）十月号――「受贈俳誌紹介」欄
風青し門出に唄ふ「御立ち酒」　**鬼之介**
○**雪嶺**（石本石鬼主宰）十、十一、十二月号――「受贈誌」欄
来る来ないあきらめかけて春の虹　**鬼之介**
国道に優る村道みどりの日　〃
○**太陽**（吉原文音主宰）十月号――「受贈誌御礼」欄
炎熱やダム湖の底の正一位　**鬼之介**
○**菜の花**（伊藤政美主宰）十月号――「諸家近詠」欄
金蔵とおぼしき蔵の片かげり　**鬼之介**
○**谺**（山本一歩主宰）十月号――「受贈誌の一句」欄
蹴つて蹴つて軽さ馴染まぬ夏蒲団　新暦文
○**波**（山田貴世主宰）十月号――「受贈誌展望」欄
飯野深草氏による水明六月号の鑑賞
「水明」六月号　通巻一〇八九号　昭和五年九月、長谷川かな女が現・さいたま市浦和区で創刊。主宰**山本鬼之介**。有季定型で自己の個性を活かした俳句を詠む。
主宰詠「鬢付け」八句より
国道に優る村道みどりの日　**鬼之介**
地毛で結ふつぶし島田よ三社祭　〃
揺り椅子の余韻薄暑の昼下がり　〃

季音「雪」同人作品より
切り込みのある糸尻よ春深し　星野和葉
艶をます虎の子渡し花の雨　由良ゆら女
季音「月」同人作品より
人の身の忍び音洩らす五月闇　鳥羽和風
背に嬰括りて飾る武者人形　町野広子
季音「花」同人作品より
鴇色の春日傘ゆくをんな坂　大塚茂子
囀や寝覚めの耳のこそばゆき　松井由紀子
「水明忌」主宰選の三極（天・地・人）
夏近し虚子の短冊草田男へ　網野月を
マヌカンの深きスリット夏隣　五明　昇
青海波の大皿並び夏近し　野田静香
「水明集」主宰選より
掛茶屋に電車の絵本山笑ふ　染谷正信
朝霞ゴルフコースの遠き声　反町　修
表紙裏に長谷川かな女の〈寝惜しみて母とありけり蛍籠〉を掲げ、主宰が母の思い出を添える。永野史代氏の「庭の花づくし他Ⅲ」は家籠りで花との日々を、大村節代氏の「ドラマ館」は飛鳥山の「渋沢栄一展」を詠み、味わい深い。
（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和三年十月三十一日現在―

野田静香	5口	鈴木貴水	10口
池田珪子	2口	由良ゆら女	10口
篠崎紀子	30口	岡野順子	10口
内田恵子	10口	鈴木和子	5口
山本鬼之介	5口		
はこべ句会	22口		

―合計109口―

❖原稿募集

季　音（雪・月・花）五句
水明集　五句（巻末添付用紙）
鼓笛集　三句（編集部より依頼のあった方）
水明通信・随筆等自由にお送り下さい。
原稿締切　毎月二十五日必着
原稿宛先　水明俳句会　編集部
〒330―0064　さいたま市浦和区岸町四―一〇―二一

後記

今年最後の「水明十二月号」をお届けします。新型コロナにもめげず、水明の発行が続けられた事にほっとしています。

去る十月二十九日に「水明塾」が予定通り開催されました。コロナ下では開催できましたと言うべきでしょうか。

午前中は水明集の方とまだ投句経験の無い誌友の方を対象に、全句講評講座が行なわれたようです。全句講評を今月号に掲載しましたので、ご出席なさらなかった方も、どうぞお目通し下さい。何かと参考になると思います。

そして、午後は神野紗希現代俳句協会副幹事長をお招きして、講演会を行ないました。これは全水明人が参加対象でしたので、私も参加させて頂きました。

紗希氏は一九八三年のお生まれとかで、身も軽く、弁舌さわやかな方で、水明の方々も魅了されたようです。

講演後に句集の販売があり「すみれそよぐ」という三冊目の句集を買わせて頂きました。表紙を開くと扉に

星空は無音の瀑布鯨飛ぶ　紗希

というお句が銀色の文字で、書かれていました。尚、この講演は、紗希氏のご協力により、水明一月号に掲載しますのでご期待下さい。

ところで、水明を繙くと真っ先に目に入るは「かな女の一句」と「華の一句」でしょう。昨年からの新しい企画の「華の一句」は昨年は七・八月号が合併号でしたので十一名、今年は十二名、併せて二十三名と言いたい所ですが、お二人が二回登場されているので二十一名でした。ある方はかな女先生と見開きとは光栄ですと言われました。主宰は全句の中から選ばれるようですが、来年は誰方の句が選ばれるのか楽しみです。

どうぞ良いお年を！

そしてご健吟を！

（節代）

今月のはてな？

維納（ウィーン）
撮（つま）み
負蝗虫（おんぶばった）
玄圃梨（けんぽなし）
徒（かち）
鵞地（まっしぐら）
育雛（いくすう）
万媚（まんび）
集（すだ）く
開（はだかっ）て
蔀戸（しとみど）

水明発行所受付時間

曜日：（月・水・金）
時間：12時半～午後4時半
（火・木・土・日・祭日は休み）
水明の行事と重なった時は休み
（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

74 54 45 33 31 31 25 19 19 17 13 頁

水明

令和三年十二月号
通巻一〇九五号
令和三年十二月一日発行

発行人　山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一七一一八
電話 048-886-六〇〇三

発行所　水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一一〇一二
電話 048-822-四七四一

誌代　半年分　六、〇〇〇円
一年分　一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分　二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分　三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇-〇-一九二三九三

印刷所　中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

三月号　十二月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

きりとりせん

山紫集

三月号　十二月二十五日締切

氏名（俳号）

十二月の兼題「鷹」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音抄

山本鬼之介

気遣ひの娘を帰す十三夜　柚木治子
敗荷や撥音はげし壇ノ浦　由良ゆら女
弓道に残心のあり爽やかに　吉住光弥
桔梗色の中に浮かびぬ後の月　網野月を
破船なほ深きに沈み雁渡る　石井喜恵
棒持てば吾は大将秋の山　石山かつ子
菊酒や永久に微笑む菊慈童　丸山マスミ
初時雨ポストに深く入る手首　鳥羽和風
禅房に円相の幅秋に臍　渡辺舎人
ポケットのむかご転がる路線バス　藤澤喜久
初紅葉御座船の窓閉ぢしまま　森本早苗
其の中の一輪を摘む野菊道　梅澤佐江
長き夜や鳥羽僧正と一つ灯に　井上玲子
デコルテの鎖骨麗し今日の菊　正木萬蝶
大利根川原迫り上ぐる赤い月　近藤徹平
畦を行く飛ぶ翔ぶ蝗捕る老女　大塚茂子
重陽や課長代理のピンヒール　石田慶子
秋深し役者名利の果て太鼓　野田静香

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

水屋の葉掬ふ女や秋袷　塩野久子
虫しぐれ臥せる母御の息さぐる　渋谷きいち
一叢の雨後の昂り昼の虫　曲淵徹雄
音楽堂を酔はせる指揮者秋深し　梅澤輝翠
分校のオルガンに乗り去ぬ燕　笹本啓子
姿見に吾が初縫ひの秋袷　西幅公子
花白粉留守番の子が鏡台に　保坂翔太
新米を磨げばタンゴのリズムかな　横山君夫
「清張」の本に栞を虫の闇　新暦文
駄菓子屋の婆の暗算夏休み　本橋稀香
水澄むや川面を遊ぶ千切れ雲　反町修
みなとみらいにゑくぼをつくる稲光　丸屋詠子
ジーンケリーのやうに雨月を歩くかな　鈴木和子
命名を墨で記せし良夜かな　越田栄子
台風の心変りの町明り　神田治江
踊りの輪手練れ師匠が先に立ち　原田秀子
裏山へ泣きに行きけり秋茄子　染谷正信
コスモスやエスエル通る日曜日　橋本京子

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗

水明　令和三年十二月一日発行　毎月一日発行
（第九十四巻　第十二号）　定価　一〇〇〇円